

アール・ブリュット 2024巡回展

抽象 の ラビリンス

— 夢みる色と形 —

Art Brut 2024 Touring Exhibition
Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form

アール・ブリュット 2024巡回展 抽象のラビリンス — 夢みる色と形 —



アール・ブリュット2024巡回展

抽象のラビリンズ

－夢みる色と形－

Art Brut 2024 Touring Exhibition

Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form

●第1会場

東京都渋谷公園通りギャラリー

2024年9月28日(土) - 12月22日(日)

●第2会場

かつしかシンフォニーヒルズ ギャラリー1・2

2025年1月17日(金) - 1月26日(日)

●第3会場

三鷹市芸術文化センター 第1美術展示室

2025年1月31日(金) - 2月12日(水)

●出張イベント

大島町開発総合センター(大島町役場) 大集会室

2024年11月16日(土)

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

Sep. 28 (Sat.) - Dec. 22 (Sun.), 2024

Katsushika Symphony Hills, Gallery 1 & 2

Jan.17(Fri.)-Jan.26(Sun.), 2025

Mitaka City Arts Center, Exhibition Room 1

Jan. 31(Fri.) -Feb. 12 (Wed.), 2025

Oshima Town General Development Center (Oshima Town Hall), Large Meeting Room

Nov. 16 (Sat.), 2024

主催 / 東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)
協力 / 葛飾区、三鷹市、大島町

Organizers / Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery (Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)

Cooperated by / Katsushika City, Mitaka City, Oshima Town

ごあいさつ

このたび、東京都と東京都渋谷公園通りギャラリーは、アール・ブリュット[※] 2024 巡回展「抽象のラビリンス 一夢みる色と形」を開催いたします。

アール・ブリュット作品の魅力を都内に巡回して紹介する展覧会は、今回で5回目を迎えました。この節目の年に、アール・ブリュット作品への関心をより一層高めることを目的として、本分野の研究者として国際的に活躍しているエドワード・M・ゴメズ氏をゲスト・キュレーターに迎え、本展を開催いたします。

今回、アール・ブリュットにおける〈抽象〉の表現にあらためて注目し、日本の作家7名の自由で想像をかきたてる作品世界を、都内3か所に巡回して紹介します。

アーティストたちの大胆かつ神秘的な表現の力を体感し、そこに表れる抽象作品が魔法のように織りなす夢の世界を感じていただければ幸いです。

私たち人類は、夢という神秘的で、不確かな感情に満ちあふれるものに常に魅了され、そこに表れるイメージ、雰囲気、そしてその捉えどころのない物語の意味を問い続けてきました。抽象作品の多くもまたその意味は捉え難く、ときに私たちの理解を超えたものでさえあります。このように夢と抽象作品は、その本質的な性質が類似しているのです。遠い夢の世界で発見された遺物のようなモチーフ、ぼんやりとしたイメージとエネルギッシュな線、色鮮やかなグリッド、カラフルで不規則な形、夢の中に現われる奇妙なフォルム。これらの作品を鑑賞する私たちは、まるで抽象のラビリンスに迷い込んだかのような不思議な気持ちになることでしょう。

最後になりますが、本展開催にあたり、貴重な作品をご出展いただきました作家の皆さま、多大なご協力を賜りました関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

2024年9月

主催者

※ アール・ブリュット(Art Brut)とは、元々、フランスの芸術家ジャン・デュビュッフェによって提唱されたことばです。今日では、広く、専門的な美術の教育を受けていない人などによる、独自の発想や表現方法が注目されるアートを表します。

謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りました下記の関係者の皆様をはじめ、お名前を記すことのできなかった多くの皆様に、心よりお礼申し上げます。
(順不同／敬称略)

伊藤駿	鈴木京子	松井健一
ガタロ	村林真哉	松井美和
柴田鋭一	櫛野展正	
對馬考哉	渡邊早葉	
土橋美穂	小友友記	
松井瑛美	金子憂花	
箭内裕樹	有井慎	

特定非営利活動法人 希望の園

クシノテラス

社会福祉法人みぬま福祉会

工房集

川口太陽の家

社会福祉法人ほほえみ

平川市地域活動支援センターおらんど

株式会社nullus

8-18

葛飾区

三鷹市

大島町

目次

Contents

抽象と夢の世界へのいざない／エドワード・M・ゴメズ	6
伊藤駿 ITO Shun	12
ガタロ Gataro	18
柴田鋭一 SHIBATA Eiiichi	26
對馬考哉 TSUSHIMA Kōya	32
土橋美穂 TSUCHIHASHI Miho	38
松井瑛美 MATSUI Emi	44
箭内裕樹 YANAI Yūki	50
各会場風景	57
出張イベント・関連イベント	66
鑑賞ガイド	70
アール・ブリュット2024巡回展 「抽象のラビリンス ―夢みる色と形―」をふりかえる／秋間敬代	71
作品リスト	73
Foreword	76
Welcome to the World of Abstraction and Dreams/Edward M. Gómez	77
Reflecting on the Art Brut 2024 Touring Exhibiton “Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form”/AKIMA Takayo	80
List of Works	83

抽象と夢の世界へのいざない

エドワード・M・ゴメズ（ゲスト・キュレーター）

様々なアーティストの作品をあるテーマのもとで集めた展覧会を企画するとき、選択した作品をひとつところに展示した際にまとまりが生まれるかどうかは予測しがたい。

実際、ギャラリーに作品が届き始め、梱包をほどいて確認を進めるにつれて、キュレーターが思い描く展覧会のビジョンが変化し、作品の特徴に左右されていくことは珍しくないからだ。その時点で、実物の作品は互いに「語り」始め、エネルギーと精神を共有するようになる。展覧会の魂は、作品同士のそういった対話から生まれる。

「抽象のラビリンズ ―夢みる色と形―」では、専門的な美術の教育を受けずに作品を制作する7人の現代日本人アーティストの作品が集まり、驚異とほとばしるような創造性の魂が作り出された。参加アーティストは、ガタロ、伊藤駿、松井瑛美、柴田鋭一、土橋美穂、對馬考哉、筋内裕樹（※アルファベット順）らである。

それぞれの作品は、この展覧会の詩的なテーマに思い思いの形でかかわっている。もとより神秘的な意味合いを持つふたつの現象「抽象アートと人間の夢」の関係を指し示すテーマだ。

抽象的な表現のアートの主題も夢の内容も、理解しがたいという共通点がある。抽象的な表現のアートを鑑賞するとき、夢でみたイメージを思い返そうとすると、人はよく「この作品は何が言いたいのだろうか？あの夢にはどんな意味があるのだろうか？」と自問する。どうしても何ら

かの答えが欲しくて、そのような問いに対して納得のいく回答が必要であると訴える。要するに人間は、毎日の生活や自分を取り巻く環境のあらゆる面についてははっきりと理解し、現実を把握したいと切に望み求めるものなのだ。

だが、抽象的な表現のアートや夢は、その秘密をやすやすとは明かさない。真意はシンボルとミステリーに包み隠されているように見え、読み解くことにもどかしい思いをする人もいるだろう。それでも、その得体の知れない性質の中には奇妙な魅力が潜んでいる。その意味を探ることは、推測と不確かな暗示のラビリンズに足を踏み入れることである。

ただ、抽象的な作品や夢の意味にはとらえどころがないとはいえ、ふたつの基本的な見方を知っておいても損はないはずだ。ひとつ目に、どんな作品も、手法は違ってても、例外なく本質的な真理のあらわれであるということ覚えておきたい。言い換えると、ある現代アーティストたちも言ったように、見えるままがすべてで裏表がないのが抽象作品である。しかし、ひとつの抽象作品を見たときの感じ方は人によって違ってもおかしくない。抽象的な表現のアートに対する反応や理解も同じではないかもしれない。

ふたつ目に、夢について言えば、古代エジプト人から近代の精神分析学者や心理療法士まで、夢解釈の先駆者たちの知見を思い出したい。それは、たとえ説明がつかないとしても、夢をみることは意識の一形態であり、夢の内容は知識の一形態であるということだ。

このような問いやアイデアを背景に、「抽象のラビリンズ ―夢みる色と形―」では、多種多様な素材、様々なスタイルを使って独自の作品を制作するアーティストたちによる絵画を展示した。表現方法は幅広く、きわめて私的だ。

ガタロは、広島ショッピングセンターで清掃員として働いていた。美術学校で制作を学んだ経験はない。その絵画には、友人たち、日々の仕事で使うほうきや掃除用具など、身の回りの物や人物が描かれている。紙くずを拾い集めてとっておき、画材にすることも多い。

この展覧会では、ガタロが特に好んで取り上げる題材である雑巾を描いた連作の中から30点を選んで展示した。ガタロは、普通の鉛筆、パステル、時には白い絵の具を使い、雑巾を描いている。ルネサンス期の芸術家たちのように、キアロスクーロの技法で対象物に彫刻のような質感を与えている。（「キアロスクーロ」はイタリア語で、絵画の中に明暗と陰影をつけることで立体的な効果を生み出す技法を指す。）

これらの作品についてガタロは、「1日1枚を1時間で描く」という自らの課した日々の日課として雑巾の絵を制作していた。絵を描き終えた後に焼酎を飲むことが、楽しみであったという。ガタロは「雑巾自体も最初から雑巾なのではなく、他の人が着とった服など、さまざまな物から雑巾になっどる。」と語っている。

ガタロの絵画は、取るに足らないような対象に価値を見出している。クシャクシャの雑巾が、作品の中では輝く宝石のようなオブジェに変

わる。

伊藤駿は、三重県を拠点に活動する若手アーティストで、県内の福祉施設「希望の園」に所属している。ロックバンド「ダッキーアクソン」のリードボーカルで作詩も担当している。

伊藤は木炭を使っている。アール・ブリュットやアウトサイダー・アートと呼ばれる自己流のアーティストの作品にはあまり見られない画材だ。指で線をぼかすなど木炭を表現豊かに用い、主に自然からとった題材を抽象化した絵を描く。魚、ヘビなどの生き物も登場する。エネルギー線線で構成されたその作品からは、認識できる対象を抽象化し、夢のような神秘的な雰囲気を作り出す方法を伊藤が本能的に理解しているのが見てとれる。

松井瑛美は、別府で活動する若手女性アーティストだ。色鮮やかな絵画を制作しながら、深い関心を持つ書道の探求も続けている。それゆえに、その線が確信に満ち、かつ表現力豊かであるのも当然だろう。紙に描かれたカラフルな絵は、ゆるやかな格子や円を中心にしたものが多い。そのエレメントは花や大きな葉の形に似ている。

松井の明るい色彩の構成を前にすると、歓喜が湧き上がるとともに別世界にいるような感覚に包まれる。そのシンプルなフォルムといきいきとした個性は、抽象表現を用いてインスピレーションを呼び起こそうとした20世紀初頭の現代芸術家たちの実験的な試みを思わせる。

柴田鋭一は、埼玉県川口市の福祉施設「工

房集」で作品を制作している。柴田は、キャンバスや紙に描くときに使う独特の抽象言語を長く育み続けてきた。普段はボールペンで制作するが、その大半に「せっけんのせ」という同じ題名が付けられている。

柴田は、作品の中でせっけんの泡に似た点や線を抽象的な形で表現している。輝きを放つその構成は、時には色の点々や絡み合った線でぎっしり密集しているが、同時にどれも空気のように軽く感じられるのが不思議だ。自由自在な線と色彩を用いた柴田の洗練された作品は優雅で独創的で、アンリ・マティス、パウル・クレー、ジャクソン・ポロックといった近代美術の先駆者である大家の作品と並べても遜色がないほどだ。

箭内裕樹は、埼玉県川口市の福祉施設「川口太陽の家」で作品を制作している。箭内は、色をつけた四角形をたくさん描いて作品を構成している。この四角形のかたまりは、見えるか見えないかという程度にふんわりとしたグリッドを形作る。箭内は、色味のコントラストを巧みに操りながら、作品のあちこちに顔などに見える記号のようなエレメントを埋め込んでいる。

箭内の色彩は時にとてもやさしく、その構成は雲のように軽やかで浮遊感がある。この展覧会に出品したアーティストの多くに共通するスタイルだが、箭内も新たに制作を始める前に下絵を描くことはないと言う。構想をせずとも、作品が自ら進化していくのだ。

神奈川県に暮らすアーティストの土橋美穂

も、即興的に作品を制作している。当然、絵画やデッサンを描き始めた時点では、その構成や主題がどうなるのか、アーティスト自身にも予測できない。

マルチアーティストの土橋の作品はとりわけ多彩で、ドローイングや絵画、粘土の人形、糸や布を使った手縫いの動物などに及ぶ。紙に描いた絵画には、水のような色彩の爆発や、シンプルな円や平行線の集合のみの抑えの効いたミニマリスト的な構成など、さまざまな抽象的な表現が見られる。

土橋は抽象的な作品の中で、家族など自分が知る人々や動物、あるいは想像の中で生まれた主題を描いていると説明している。それぞれの作品からは、アーティストの強い創造の衝動を感じとることができる。

青森県平川市在住の対馬考哉は、主に紙に様々なスタイルの絵画やデッサンを描く。単色でまとめたり、色彩をたっぷり使ったり、どれもエネルギー感あふれる構成だ。シンプルな細い線で形状を繰り返し、密度の高いランダムなパターンを描くこともある。

抽象化した頭部や顔などの対象の集合を、図式のようにグループ化した作品もある。だが、この展覧会で展示された一面緑色の抽象画もまた対馬のアートだ。それは、自然を表現しているのだろうか、生い茂る草をクローズアップで撮った写真のようにも見える。

対馬は、作品の中で、不安定な思考や感情を的確に表現する方法を模索し続けているように

見える。ロックンロールにインスピレーションを受けているという対馬の絵画やドローイングには、実際にその音楽が持つ自由な感性が感じられる。

この展覧会のデザインも独特で、ハニカムボード(段ボール板)を斬新な手法で用いて展示パネルと自立式の壁を作っている。会場構成を担当した塚本由晴とアトリエ・ワンのチームは、アール・ブリュットのアーティストの世界からその着想を得た。

アール・ブリュットのアーティストの多くは、ガタロのように、メインストリームの社会や文化の周縁で生活しながら作品作りをしているので、潤沢な資金はないかもしれないが、その想像力には限りがない。いきおい、自分で見つけた紙、段ボール、木くず、布切れなどの材料に、安価な絵の具や接着剤を使って制作することになる。アトリエ・ワンによる本展の会場構成には、アーティストの作品制作に段ボールが重要な役割を果たしている現実が映し出されている。

それはまた、埼玉県の「工房集」のアーカイブのイメージでもある。塚本は、現代日本のアール・ブリュットのアーティストや、その絵画、デッサン、彫刻などの制作の現場であるワークショッ

ゲスト・キュレーター エドワード・M・ゴメズ

美術評論家、美術史家、アール・ブリュット・コレクションの諮問委員会会員。批評家として『ニューヨーク・タイムズ』『ハイパーアレルギック』『アートニュース』『アート・イン・アメリカ』『ジャパン・タイムズ』など多数の新聞雑誌に寄稿。イギリスのアウトサイダー・アートの雑誌『ロー・ビジョン』の元海外通信員 兼 編集者。『brutjournal(ブリュットジャーナル)』の創刊者 兼 編集長。著作に、Genqui Numata (Franklin Furnace Archive), Yes: Yoko Ono (Abrams), The Art of Adolf Wölfli: St. Adolf-Giant-Creation (American Folk Art Museum/Princeton University Press), Hans Krüsi (Iconofolio/Outsiders) など。

プについて調査を進める中で実際に「工房集」を訪れ、所属アーティストの完成作品が段ボール箱に納められ、棚に整理されている様子を目にした。そこで保管されている作品は、気軽に取り出して来訪者に見せたり、展示用にギャラリーや美術館に送ったりすることができる。

こうしてアトリエ・ワンは、段ボールを使って、波打つ壁とアーティストの作品を展示する展示空間を生み出した。また、作品を保管する棚をイメージした高い壁を建て、アール・ブリュットのアーティストの世界が持つ様々な様相を思い起こさせるデザインとした。

「抽象のラビリンス —夢みる色と形—」展に並ぶ作品と同様に、会場にもごく普通の段ボールが意外な形で巧みに使われているのを見れば、抽象的な表現のアートでは夢の中と同じように、普通でないと思われることが当たり前なのであり、容易に理解できないことにも、いわゆる現実の物質世界にまつわる事実と同じくらい実体が伴っているのだと改めて思い知らされる。

この展覧会に集められた作品は、不思議と魅惑と驚きに満ちた、夢みる抽象的な表現のアートの力を謳歌している。

凡例

作品の情報は、東京都渋谷公園通りギャラリーの調査したデータに加え、作家と所蔵者から提供されたデータを参照した。

作品リストには、作家別に、「図版番号」、「作品名」、「制作年」、「材質・技法」、「サイズ(縦×横cm)」、「所蔵先」の順に記載した。

各作家ページの作品キャプションには、「図版番号」、「作品名」、「制作年」を記載した。

作家解説は秋間敬代(東京都渋谷公園通りギャラリー)が執筆した。

視覚障害のある方のための触図をつかった鑑賞ツアー、分身ロボット「OriHime」とまわる鑑賞ツアーは河原功也(東京都渋谷公園通りギャラリー)が執筆した。

コピーライト/写真クレジットは、巻末に記載した。

Notes

Information on the artworks is based on the data provided by the artist and the collector, in addition to the data researched by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

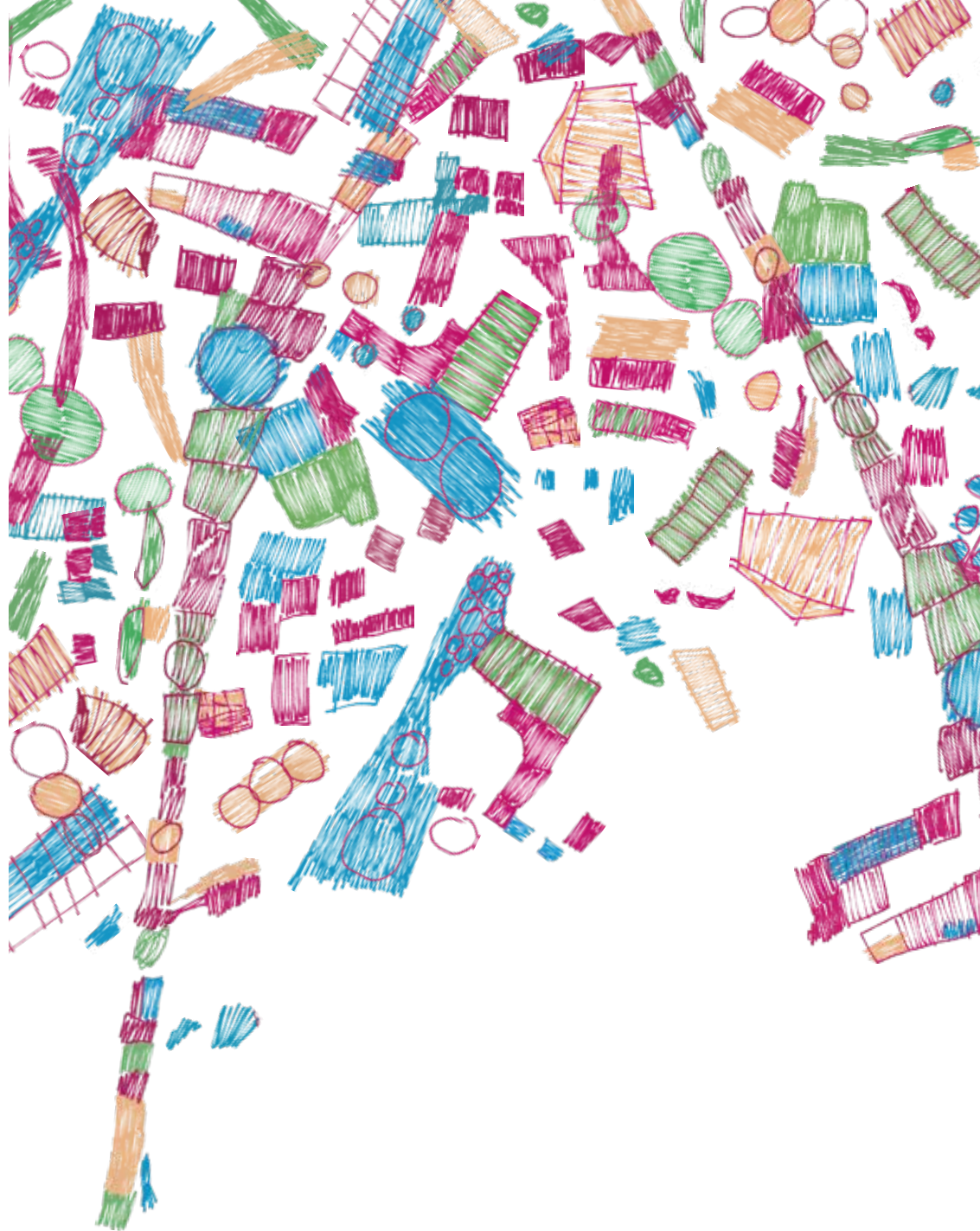
List of works includes, by each artist, the information for each artwork is given in the following order: Catalogue Number, Title, Date, Materials, Size (height×width, cm), and Collection.

The Caption of each artist's page is given in order of Catalogue Number, Title, Date.

The artist commentary was written by AKIMA Takayo (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery).

Tactile tour for the blind and visually impaired and Exhibition tour together with OriHime avatar robots were written by KAWAHARA Koya (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery).

Copyrights and photo credits appear at the back of the catalogue.



伊藤 駿 いとう しゅん

1995年 三重県生まれ

伊藤駿は、2014年から三重県松阪市にある福祉施設「まつさかチャレンジドブレイス希望の園」に通い始めた。最初は音楽に興味があったが、絵画を制作している仲間の影響を受けて、絵も描くようになった。伊藤は、その時の気分や直感を大切に絵を描いており、モチーフや描き方に迷っているときには制作しない。ウシガエルやアメリカザリガニのように身近な生き物から、マンモスやキングコブラなど実際に見たことの無い生き物まで、木炭を使ってさまざまな題材を描いている。音楽が大好きで、「ダッキーアクソン」というロックバンドのリードボーカルとしても活躍している。絵を描くときも音を大事にしている。ウシガエルの鳴き声や、木炭と紙がこすれる音にも耳を傾け、その印象を絵に反映させている。伊藤は、一緒に創作活動をしている仲間にも刺激を受けながら、日々、制作を続けている。代表的な参加展覧会として、「第1回 三重の荒ぶるアーティストたち展」(2023年、三重県文化会館 ギャラリー)などがある。

ITO Shun

Born in 1995, Mie Prefecture

ITO Shun began attending Kibou-no-Sono (Garden of Hope), a welfare facility in Matsusaka City, Mie Prefecture, in 2014. Initially drawn to music, he started painting under the influence of his artistically inclined peers. ITO places great importance on his mood and intuition when creating art, choosing not to draw when he feels unsure about the motif or technique. Using charcoal, he depicts a wide range of subjects, from familiar creatures like bullfrogs and crawfish to animals he has never seen in person, such as mammoths and king cobras. His passion for music continues as the lead vocalist of the rock band DAKKI AKSON. Sound also plays a major role in his artistic process; ITO listens attentively to the sounds around him—be it the croak of a bullfrog or the friction between charcoal and paper—reflecting these auditory impressions in his art. Continually inspired by fellow creators around him, ITO continues to pursue his artistic endeavors day by day.

Notable exhibitions include “The 1st Mie’s Untamed Artists Exhibition” (2023, Mie Center for the Arts).

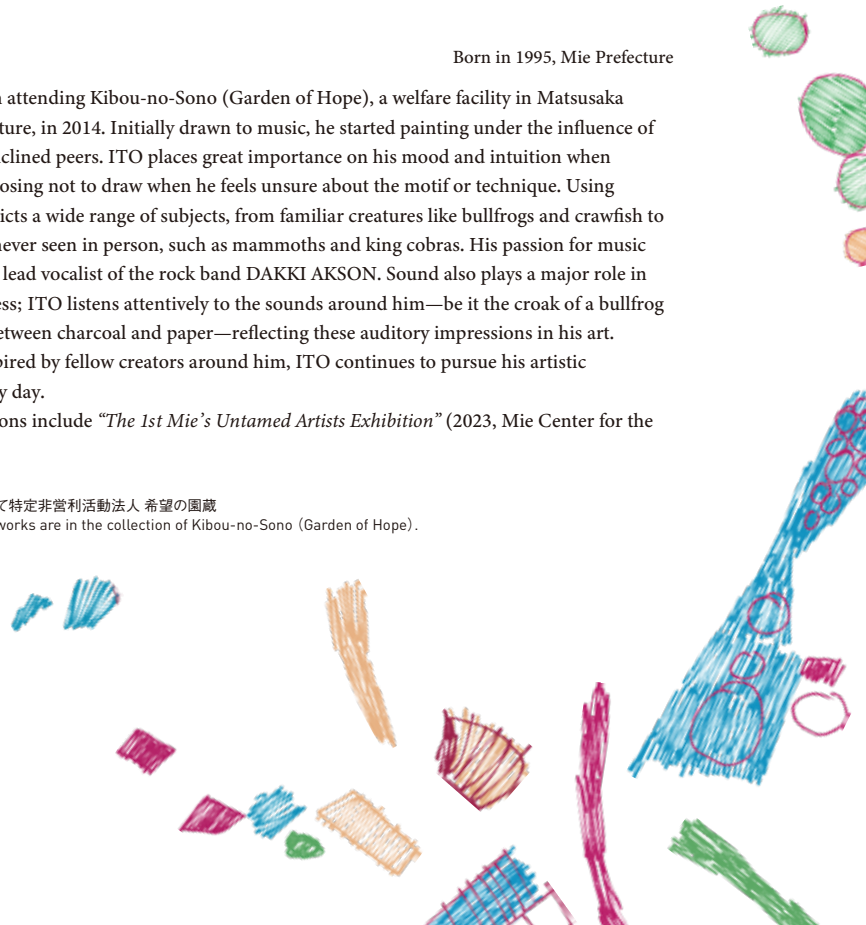
※伊藤駿の作品は全て特定非営利活動法人 希望の園蔵
All of ITO Shun's works are in the collection of Kibou-no-Sono (Garden of Hope).



1-1 ウシガエル 2022年 Bullfrog 2022



1-2 キングコブラ 2023年 King Cobra 2023





1-3 マンモス 2022年 Mammoth 2022



1-5 戦う司会者 2022年 Battling MCs 2022



1-4 アメリカザリガニ 2022年 Crawfish 2022



1-6 ベニクラゲ 2023年 Immortal Jellyfish 2023



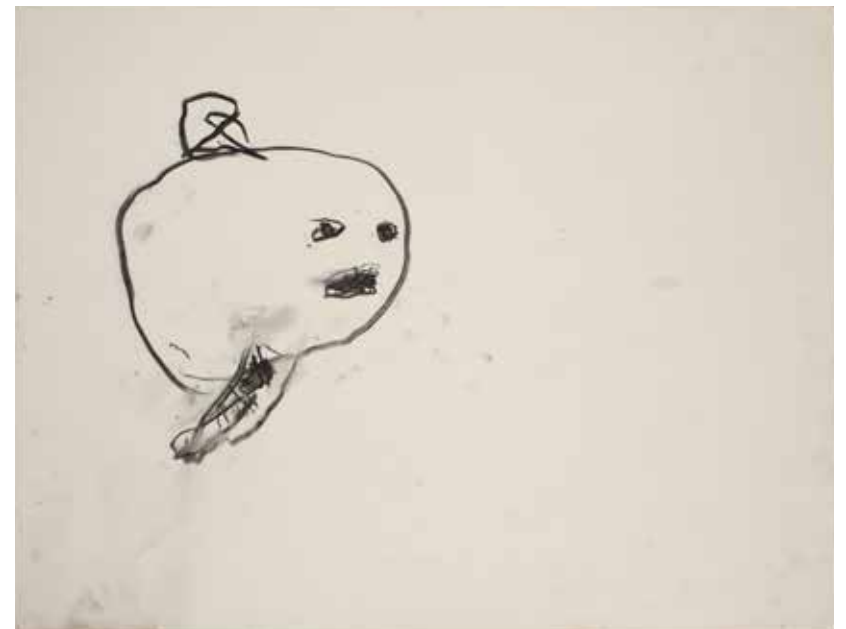
1-7 鶴 2022年 Crane 2022



1-9 豹 2022年 Leopard 2022



1-8 ギター 2021-2022年 Guitar 2021-2022



1-10 マンボウ 2022年 Sunfish 2022

ガタロ

1949年 広島県生まれ

ガタロは、中学時代は洋画部に所属、高校時代は自ら美術部をつくり、絵に親しんだ。高校卒業後は大阪の印刷会社に就職したが、工場での仕事は想像以上に大変だった。仕事の合間に絵を描くことが心の支えとなった。その後、各地で様々な職を経験した後、20代後半で広島に帰った。そして、33歳の頃、原爆ドームの近くにある市営基町アパート1階のショッピングセンターの清掃員として働くようになった。働き始めた頃は、仕事の大変さや体力面での不安から、仕事を辞めることを何度も考えた。その時、ガタロの目に映ったのは、一生懸命働いてすり減ったモップや雑巾。毎日使っている掃除道具の佇まいに愛おしさを感じ、拾ってきたクレヨンなどでスケッチをするようになった。2018年4月から雑巾の連作を描き続けるガタロ。使い古され、水分を搾り取られた雑巾の姿に、自分の姿を重ね合わせている。

代表的な参加展覧会として、「平成美術：うたかたと瓦礫 1989-2019」(2021年、京都市京セラ美術館)などがある。

Gataro

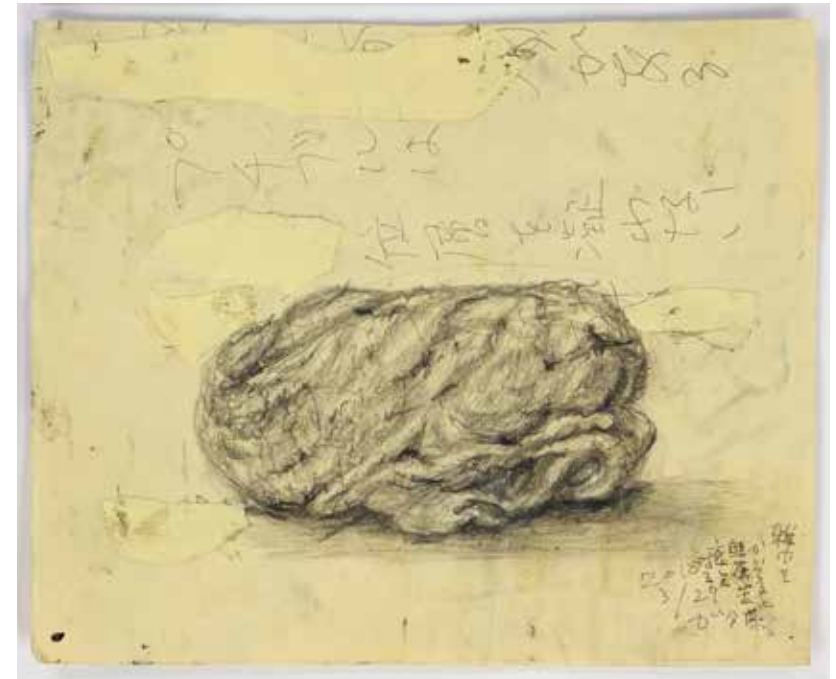
Born in 1949, Hiroshima Prefecture

Gataro's artistic journey began during his school years when he was a member of the Western Painting Club in junior high and founded an art club in high school. After graduation, he worked at a printing company in Osaka. But, finding the factory work more demanding than he had imagined, he sought solace in drawing during work breaks. Later, Gataro returned to Hiroshima in his late 20s, following various jobs across Japan. At 33, he became a janitor at the shopping center on the ground floor of the city-run Motomachi apartment complex near the Atomic Bomb Dome. Initially struggling with the physical demands of his work, Gataro thought many times of quitting. However, the worn-out mops and rags, testaments to his hard work, caught his eye at that time. Finding inspiration in the appearance of his daily cleaning tools, he began to sketch them using crayons and other things he had picked up. Since April 2018, Gataro has focused on a series of rag drawings, seeing in these wrung-out, well-used cloths a reflection of his own existence.

His work has been featured in exhibitions such as "Bubbles/Debris: Art of the Heisei Period 1989-2019" (2021, Kyoto City KYOCERA Museum of Art).



※ガタロの作品は全てクシノテラス(榎野展正)蔵
All of Gataro's works are in the collection
of Kushino Terrace (KUSHINO Nobumasa).



2-1



2-2



2-3



2-5



2-4



2-6



2-7



2-8



2-13



2-14



2-9



2-10



2-15



2-16



2-11



2-12



2-17



2-18



2-19



2-20



2-25



2-26



2-21



2-22



2-27



2-28



2-23



2-24



2-29



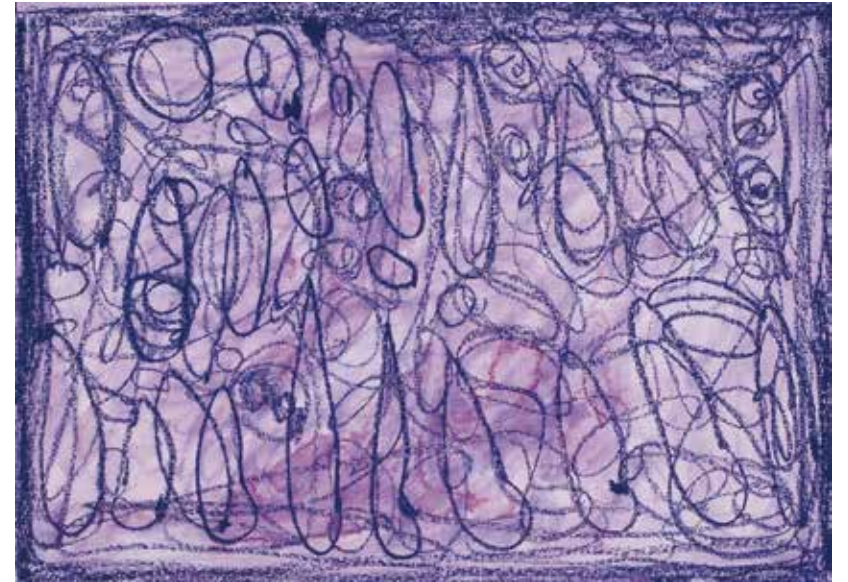
2-30

柴田 鋭一 しばた えいいち

1970年 埼玉県生まれ

柴田鋭一は、30年ほど前から絵を描き始めた。最初は数字の「2」と「3」を描いていたが、そのうち「せっけんのせ」と呼ばれる作品を描くようになった。水性ボールペン、マーカーなどで、石鹸の泡や、植物の蔓を思わせる曲線を描く。線の間には、大小の点や小さな四角い形が浮かんでいる。それぞれの線や形は、反発し合い、重なり合いながら、ひとつの世界を作り上げていく。キャンバスに水性ボールペンで線を描くと、「カリカリ」という心地よい音と感触が生まれる。その音と感触が大好きで、最近では画用紙よりもキャンバスに絵を描くことを好んでいる。水遊びが好きな柴田は、濡れた手で制作中の作品を触ることもある。手で触れた部分の水性ボールペンが滲むことで、自然と絵に奥行きが生まれる。柴田の作品は海外でも注目され、様々な展覧会やアートフェアに出展し、活躍の場を広げている。柴田が所属する「工房集」では、たくさんの仲間が表現活動を行っている。仲間と囲まれながら、今日も机に向かい、絵を描いている。

代表的な参加展覧会として、「日本のアール・ブリュット もうひとつの眼差し」展(2018-2019年、スイス・ローザンヌ、アール・ブリュット・コレクション)などがある。



3-1 せっけんのせ 2000年 Soap 2000

SHIBATA Eiichi

Born in 1970, Saitama Prefecture

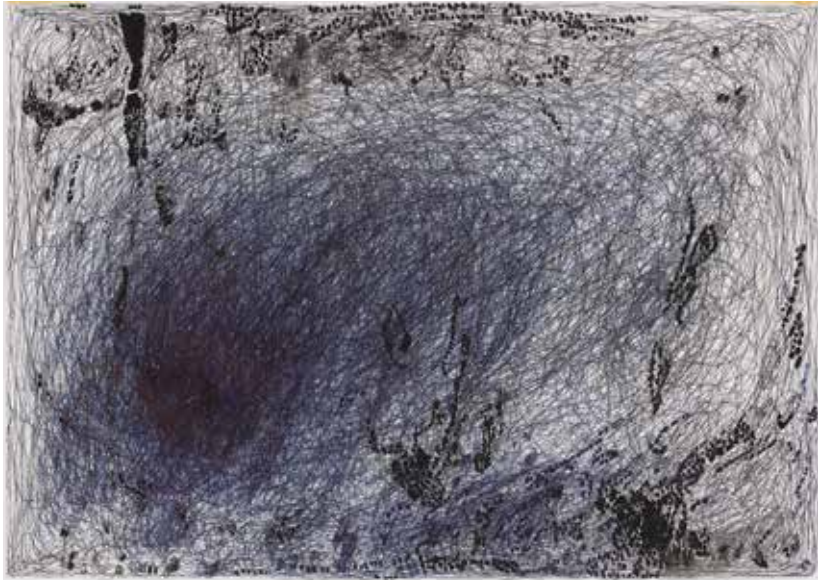
SHIBATA Eiichi began drawing about 30 years ago. Initially, he only drew the numbers “2” and “3” but later began creating works he calls “Sekken no Se” (Soap). Using water-based ballpoint pens and markers, SHIBATA creates curvilinear forms reminiscent of soap bubbles or plant tendrils. Dots of varying sizes and small squares appear between the lines, with the lines and shapes simultaneously repelling and overlapping to form a unique world. Drawing lines on canvas with water-based ballpoint pens creates a satisfying scratching sound and tactile sensation. SHIBATA delights in this sound and sensation, which has recently led him to prefer this medium over paper. He also loves working with water and sometimes touches his works with wet hands. This causes the ink to bleed where touched, naturally creating depth in his pieces. SHIBATA’s art has gained international recognition and has been shown in various exhibitions and art fairs, broadening its appeal. Many fellow artists at Kobo-Syu, the studio to which SHIBATA belongs, engage in expressive activities. Surrounded by these companions, SHIBATA is drawing at his desk again today.

His art has been featured in exhibitions such as “Art Brut from Japan, Another Look” (2018-2019, Collection de l’Art Brut, Lausanne, Switzerland).

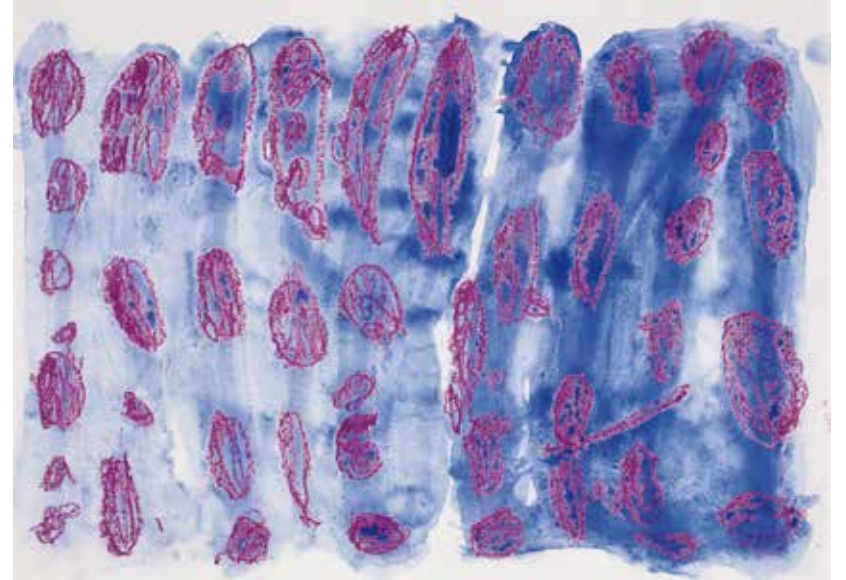
※柴田鋭一の作品は全て社会福祉法人みぬま福祉会 工房集蔵
All of SHIBATA Eiichi’s works are in the collection of Kobo-Syu.



3-2 せっけんのせ 2006年 Soap 2006



3-3 せっけんのせ 2010年 Soap 2010



3-5 せっけんのせ 1998年頃 Soap ca.1998



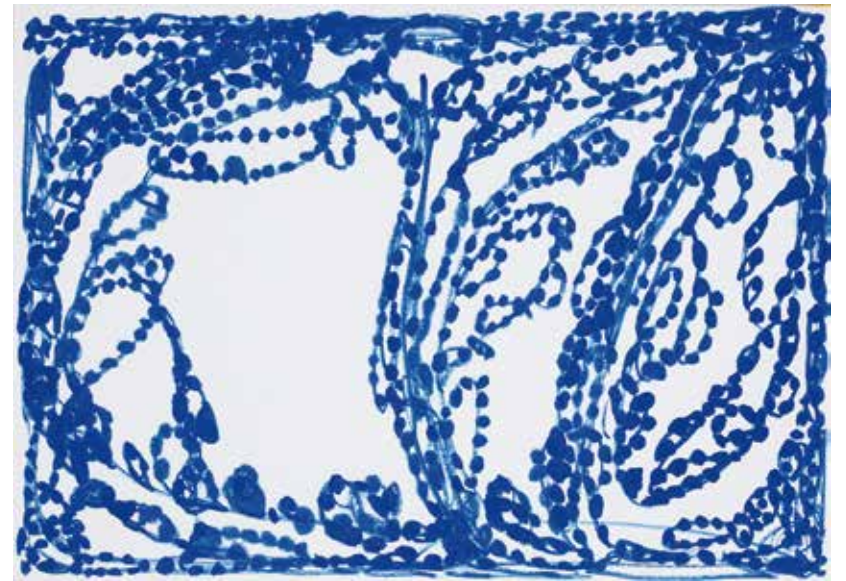
3-4 せっけんのせ 2011年 Soap 2011



3-6 せっけんのせ 制作年不詳 Soap Date unknown



3-7 せっけんのせ 2021年 Soap 2021



3-9 せっけんのせ 2004年 Soap 2004



3-8 せっけんのせ 制作年不詳 Soap Date unknown



3-10 せっけんのせ 2016年 Soap 2016

對馬 考哉 つしま こうや

1986年 青森県生まれ

對馬考哉は、大学進学を機に北海道で生活していたが、25歳の頃に故郷の青森県平川市に戻った。最初は小説を執筆していたが、通っていた「平川市地域活動支援センターおらんど」のスタッフに勧められて、絵も描くようになった。「小説は煮込み料理。時間をかけて煮込んでいく。」「絵は中華料理。強火でガーッと仕上げている。」と對馬は語る。絵を描くときは、時間をかけず思いのままに一気に描いていく。對馬の作品には、こちらに何かを訴えかけているような人物が、たびたび描かれている。「FORGIVE」と「BOW」という作品には、「EVERYBODY SHOULD BE ACCEPTED」という文章が記されている。この文章には、全ての人を受け入れられる社会であってほしいという對馬の思いが込められている。代表的な参加展覧会として「第3回 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 公募展」(2021年、Bunkamura Gallery / Wall Galleryほか)などがある。

TSUSHIMA Kōya

Born in 1986, Aomori Prefecture

TSUSHIMA Kōya lived in Hokkaido during his university years before returning to his hometown of Hirakawa City, Aomori Prefecture, at 25. Initially focused on writing novels, he began painting at the encouragement of staff at the Hirakawa City Community Activity Support Center All Round, which he attended. TSUSHIMA says: “Novels are like slow-cooked dishes, taking time to simmer. Paintings are like Chinese cuisine, finished quickly over high heat.” His paintings are created swiftly and intuitively. TSUSHIMA’s works often feature figures that seem to be conveying a message to the viewer. His pieces FORGIVE and BOW include the phrase “EVERYBODY SHOULD BE ACCEPTED,” reflecting his desire for a society that embraces all individuals.

His work has been featured in “The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS The 3rd International Art Exhibition” (2021, Bunkamura Gallery / Wall Gallery, and elsewhere).

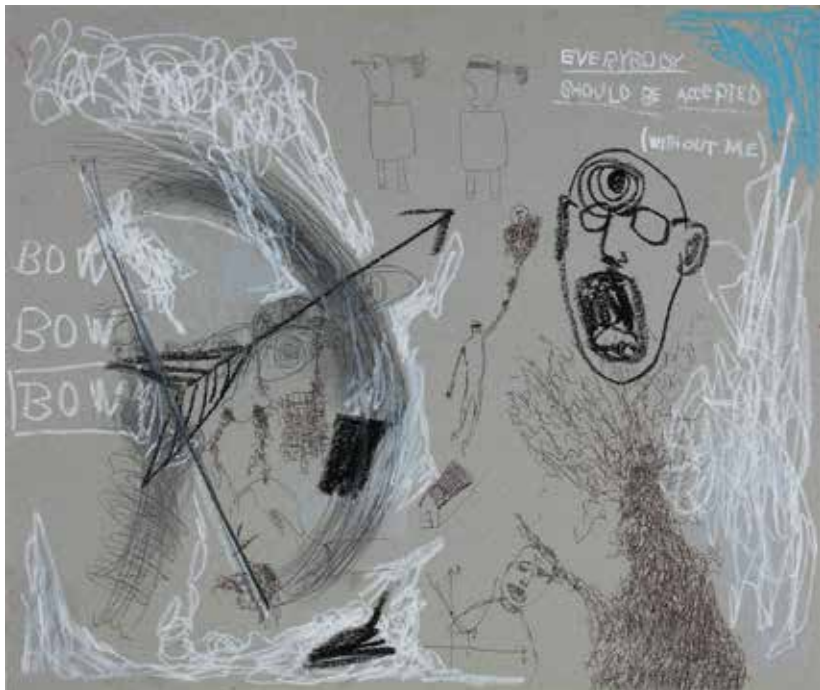
※對馬考哉の作品は全て平川市地域活動支援センターおらんど蔵
All of TSUSHIMA Kōya’s works are in the collection of All Round.



4-1 ウクライナ侵攻 2022年 Invasion of Ukraine 2022



4-2 FORGIVE 2024年 FORGIVE 2024



4-3 BOW 2024年 BOW 2024



4-5 友達 2020年 Friends 2020



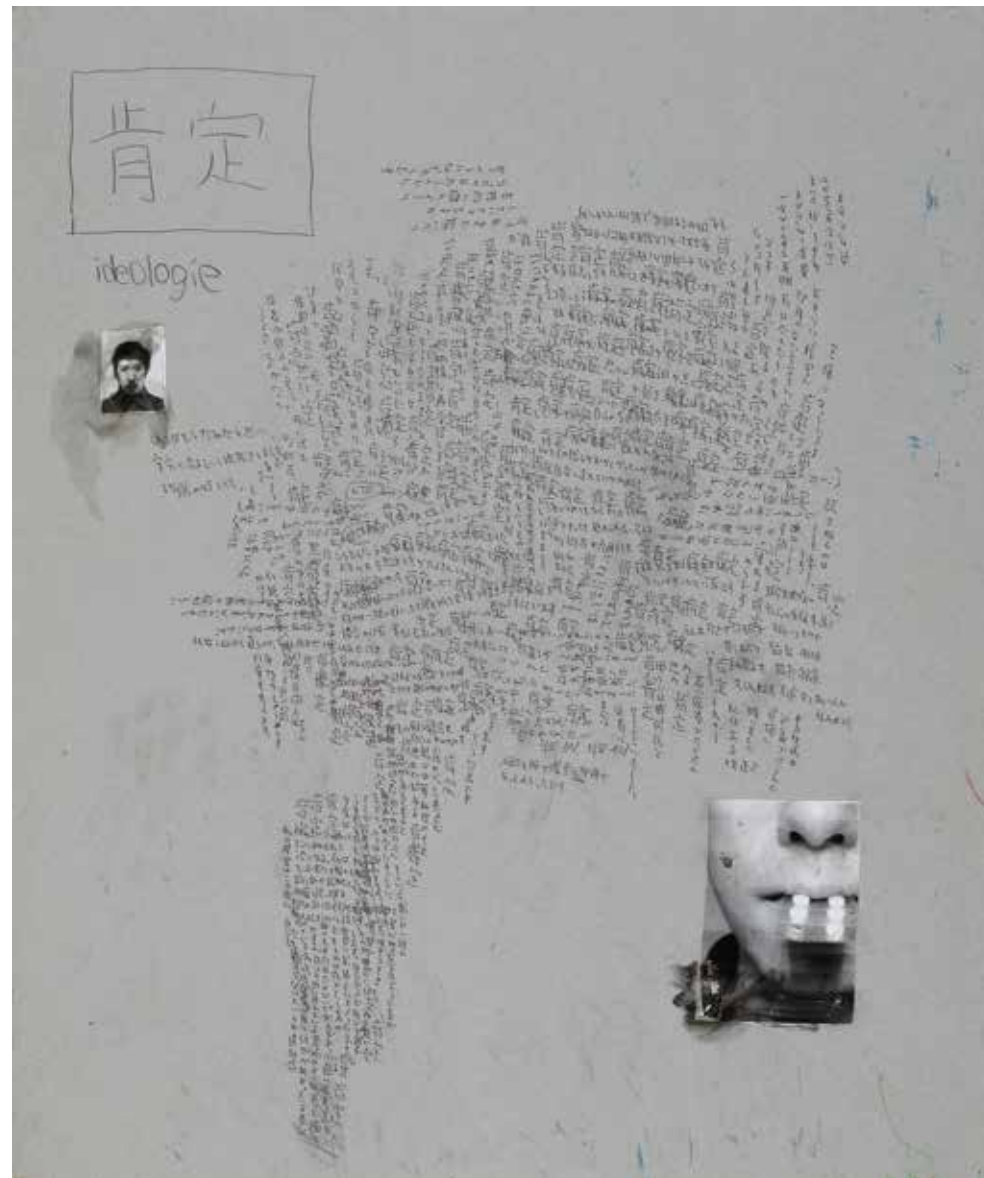
4-4 NOTHING (BUT THE SKY) 2022年頃 NOTHING (BUT THE SKY) ca.2022



4-7 軍鶏 2023年 Fighting Cock 2023



4-6 (左上) 葱 2020年頃 *Green Onion* ca.2020
4-8 (右上) 無題 2012年 *Untitled* 2012
4-10 (下) 無題 2020年 *Untitled* 2020



4-9 肯定 2024年 *Affirmation* 2024

土橋 美穂 つちはし みほ

1971年 東京都生まれ

土橋美穂は、養護学校卒業後、民間企業や複数の福祉事業所で就労した。現在は、株式会社nullusが運営している自家焙煎のコーヒー店「8-18」(神奈川県相模原市)で創作活動^{はちいち}を続けている。土橋は、店舗で接客をしながら、奥のアトリエで絵を描いている。元々は、ビーズでアクセサリーを作ることが好きだった。絵を描くようになったのは、8-18のスタッフに勧められてからだ。土橋にとって絵を描くことは、日々の生活に無くてはならないものとなっている。土橋は、水性ペンやアクリル絵の具を使って、抽象的な作品や動物を題材とした作品を制作している。本展には、画面に青い円を描いた作品や、色とりどりの小さな点が、窓に打ち付ける雨粒のように広がる作品などを出展している。それらの点や線は、水性ペンやアクリル絵の具の特性を利用し、ところどころ滲ませたり、色を部分的に混ぜたりすることで、全体に幻想的な雰囲気を漂わせている。

代表的な参加プロジェクトとして、「SDGs Color art project」(2022年)がある。

TSUCHIHASHI Miho

Born in 1971, Tokyo

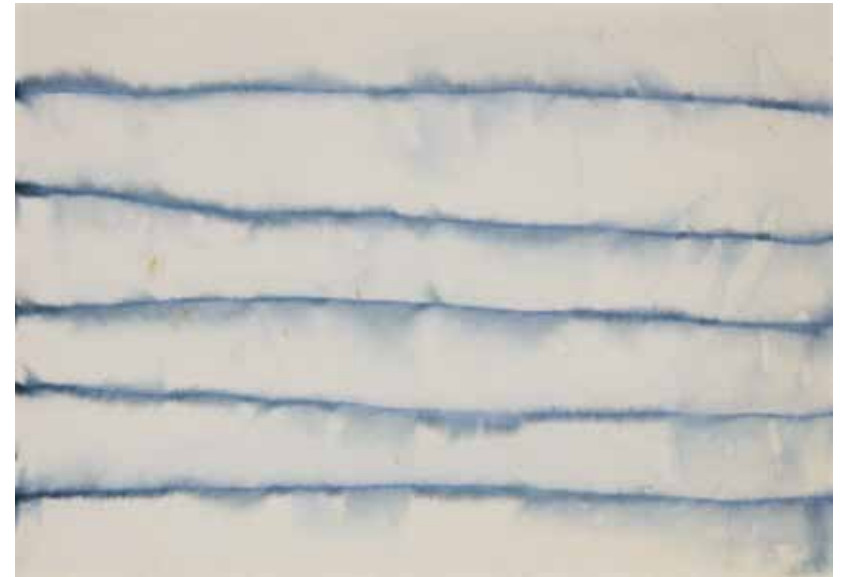
After graduating from a special needs school, TSUCHIHASHI Miho worked at a private company and several welfare facilities. She currently creates art at 8-18, a coffee shop that roasts its coffee in-house in Sagami-hara City, Kanagawa Prefecture, operated by nullus Inc..

TSUCHIHASHI divides her time between serving customers and painting in the shop's studio in the back. Originally fond of making bead jewelry, she began painting at the encouragement of 8-18's staff. For TSUCHIHASHI, painting has become an essential part of daily life. She creates abstract works and animal-themed pieces using water-based pens and acrylic paints. Her works in this exhibition include pieces with a blue circle drawn on the picture surface and ones where small, multicolored dots spread out like raindrops hitting a window. Leveraging the properties of water-based pens and acrylic paints—allowing the lines and dots to blur in places and selectively mixing colors—her dots and lines evoke an overall fantastical atmosphere.

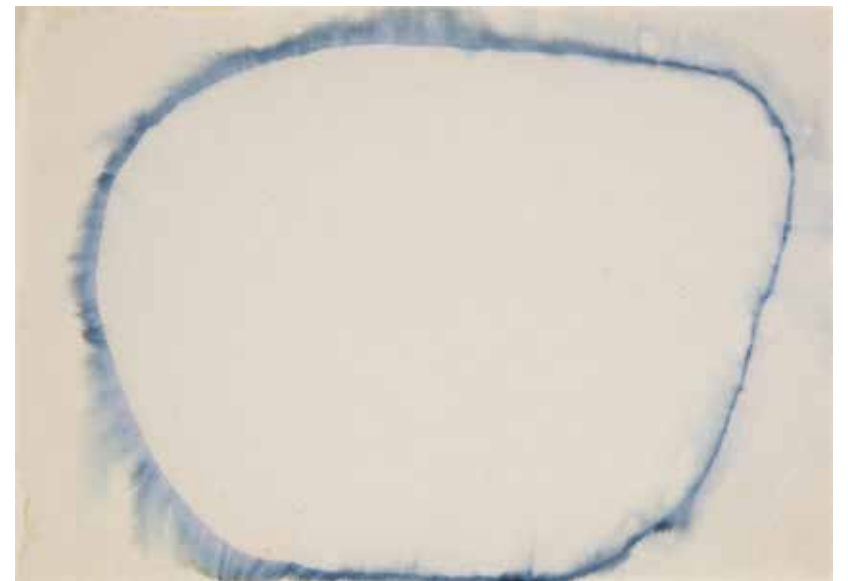
A notable project she participated in is the “SDGs Color Art Project” (2022).

※土橋美穂の作品は全て株式会社nullus蔵

All of TSUCHIHASHI Miho's works are in the collection of nullus Inc..



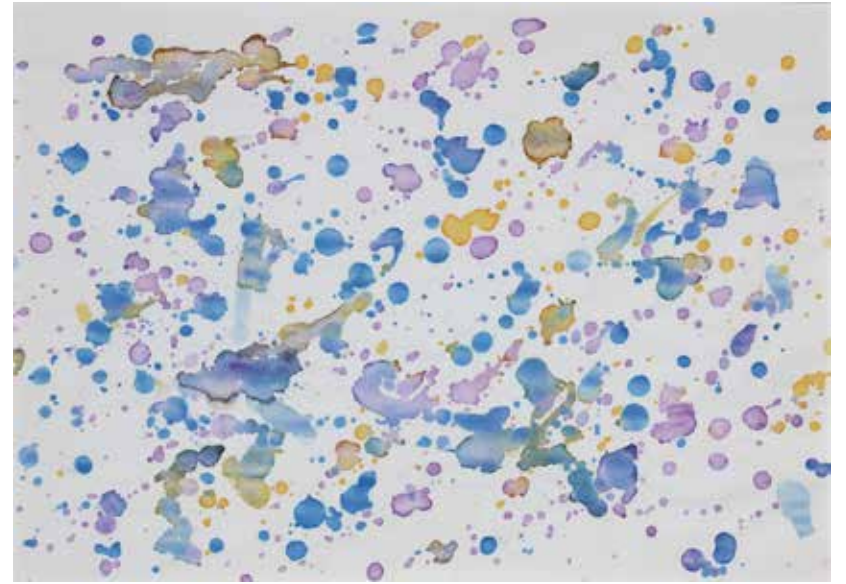
5-1 無心 2020年 No-Mindedness 2020



5-2 無心 2020年 No-Mindedness 2020



5-3 無心 2020年 No-Mindedness 2020



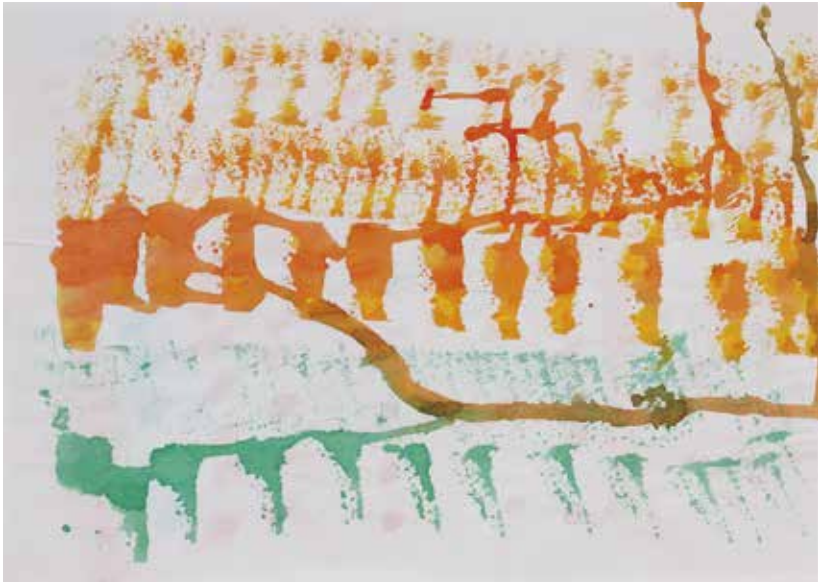
5-5 無心 2021年 No-Mindedness 2021



5-4 無心 2021年 No-Mindedness 2021



5-6 無心 2021年 No-Mindedness 2021



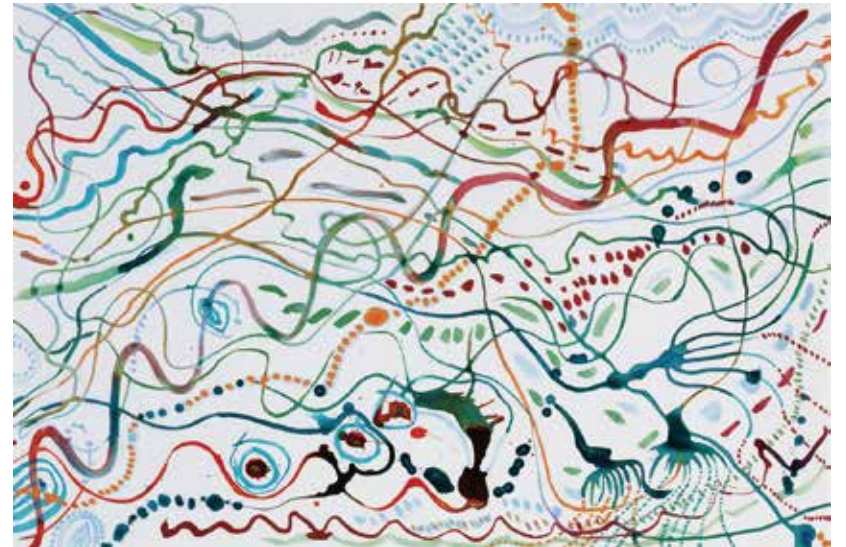
5-7 無心 2021年 No-Mindedness 2021



5-9 色々 2022年 Various Colors 2022



5-8 無心 2021年 No-Mindedness 2021



5-10 色々 2022年 Various Colors 2022

松井 瑛美 まつい えみ

1992年 静岡県生まれ

松井瑛美は、静岡県で生まれ、2002年に父親の転勤に伴い大分県に移住した。高校2年生の頃に地元の絵画教室に通い始めたことがきっかけで、絵を描くようになった。好きな絵を自由に描くことができる環境の中で、その個性が開花していった。花や果物などの身近な題材を、アクリル絵の具や水彩絵の具、色鉛筆を使って、自由な色と形で表現している。大きな丸を描いて表したアジサイの花には、黒い格子状の線を引き、マスの中に絵の具を塗っていく。背景に水色の線を加えると、雨の中で花開くアジサイにも見える。松井の絵に描かれた、ぶどう、みかん、かぼちゃ、バラなどのモチーフは、自らの意思で動き出したような、不思議な揺らぎを感じさせる。現在は、週に5日、福祉事業所等で働きながら絵画の制作を続けている。これまでに制作した絵画は600点を超過しており、忙しい日々を送るなかでも、創作に対する集中力と熱意は変わらない。

代表的な参加展覧会として、「第4回 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 公募展」(2022年、Bunkamura Gallery / Wall Galleryほか)などがある。

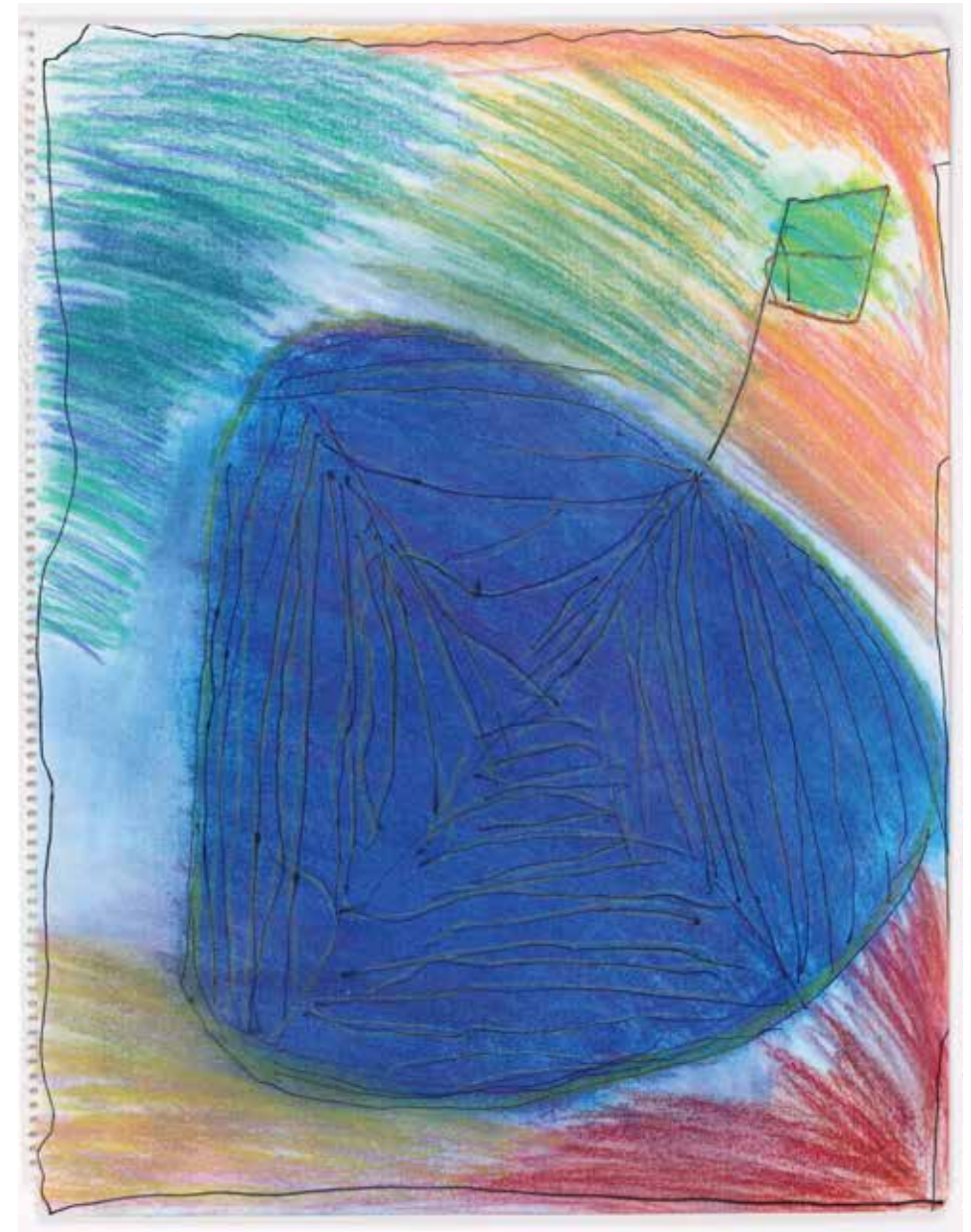
MATSUI Emi

Born in 1992, Shizuoka Prefecture

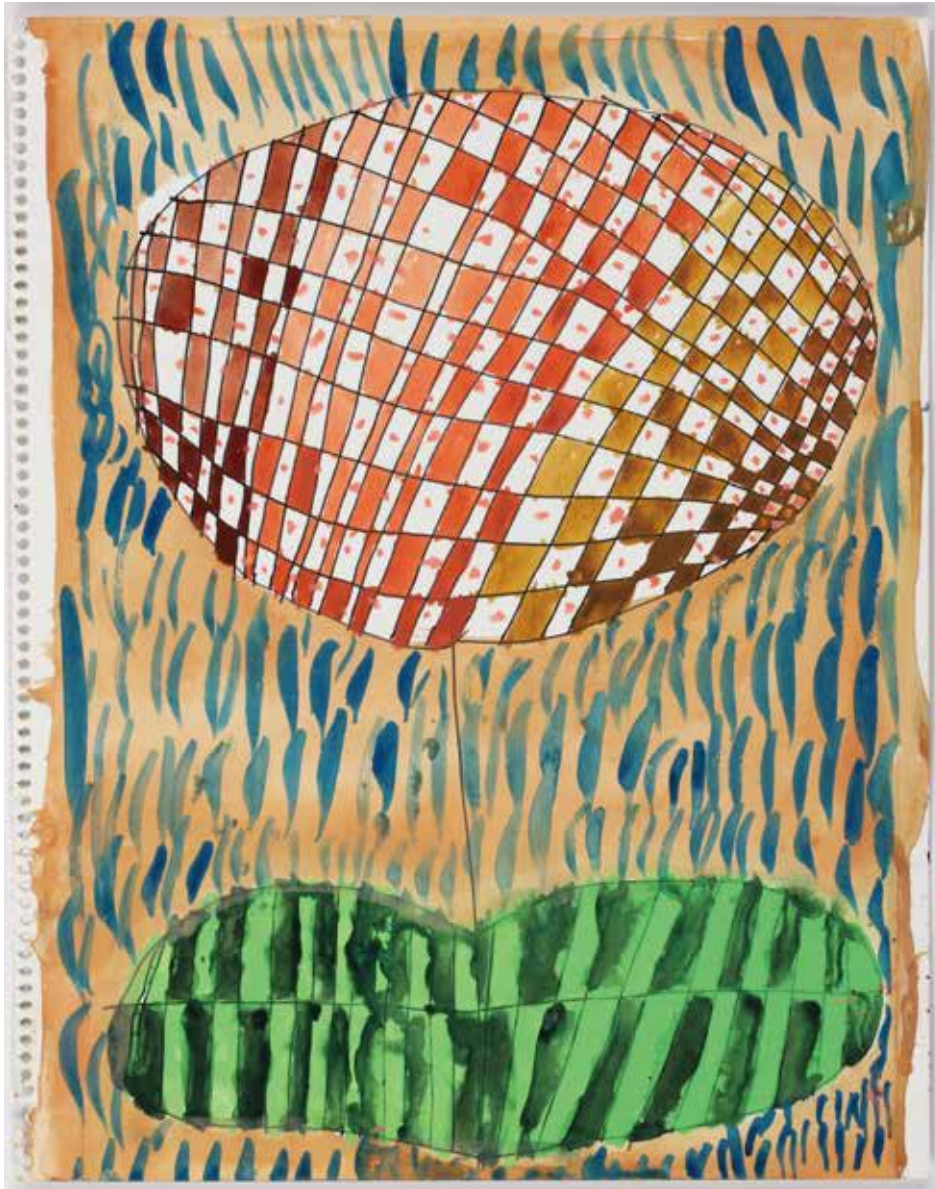
MATSUI Emi was born in Shizuoka Prefecture and moved to Oita Prefecture in 2002 due to her father's job transfer. She began painting after joining a local art class while in the 11th grade. In this environment that encouraged free expression, her unique style blossomed. MATSUI uses acrylic paint, watercolors, and colored pencils to depict familiar subjects like flowers and fruits in whatever colors and forms she likes. In her depictions of hydrangea flowers, represented by large circles, she draws black gridlines and fills them with paints in a checkered pattern. Adding light blue lines in the background gives the impression of hydrangeas blooming in the rain. The motifs in MATSUI's paintings—grapes, tangerines, pumpkins, roses, etc.—seem to possess a mysterious shimmering, as if they have begun to move of their own accord. Currently, MATSUI works five days a week, including at a welfare facility, while continuing her artistic practice. She has created over 600 paintings to date, maintaining her focus and passion for creation despite a busy schedule.

Her work has been featured in exhibitions including "The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS The 4th International Art Exhibition" (2022, Bunkamura Gallery / Wall Gallery and elsewhere).

※松井瑛美の作品は全て作家蔵
All of MATSUI Emi's works are in the collection of the artist.



6-1 伝説の紫色の謎のフルーツ 制作年不詳 Legendary Purple Mystery Fruit Date unknown



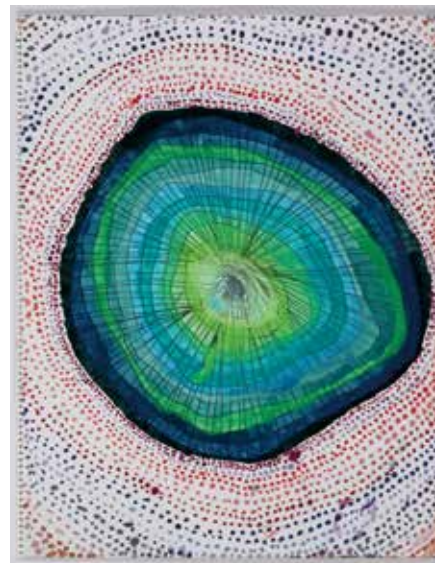
6-2 アジサイ 制作年不詳 Hydrangea Date unknown



6-3 ラ・フランス 制作年不詳 La France Pear Date unknown



6-4 かぼちゃ1 2019年頃 Pumpkin1 ca.2019



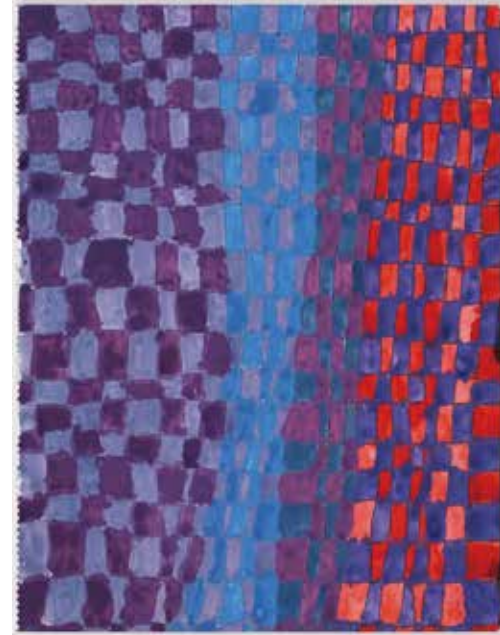
6-5 ぶどう 制作年不詳 Grapes Date unknown



6-6 みかん2 制作年不詳 Mandarin Orange2 Date unknown



6-7
彼岸花 2015-16年頃
Red Spider Lily ca.2015-16



6-9
無題 制作年不詳
Untitled Date unknown



6-8
無題 制作年不詳
Untitled Date unknown



6-10
薔薇 制作年不詳
Rose Date unknown

箭内 裕樹 やない ゆうき

1985年 埼玉県生まれ

箭内裕樹は、ハガキや名刺を作る和紙作りの仕事をしていましたが、2012年頃から絵を描くようになった。絵を描き始めるときは、所属する福祉施設「川口太陽の家」のスタッフと一緒に、好きな色のボールペンを選ぶ。画面に向かうと、まわりを気にせず一心不乱にペンを走らせていく。白い画用紙の上に、縦横に線を伸ばし、四角く区切られたそれぞれのマスを、オレンジ・緑・ピンク・水色の線で、力強く塗りつぶす。その中に、丸やハート、笑顔の人物を描いていく。その様子は、工房で一緒に創作を続ける仲間たちを描いたものなのだろうか。箭内は、音楽が好きで、作業室に流れている曲を聴きながら絵を描くこともある。そんなときは、思わず鼻歌を歌いながらボールペンを走らせる。

代表的な参加展覧会として、「現代 アウトサイダーアートリアルー現代美術の先にあるものー」(2019年、GYRE GALLERY)などがある。

YANAI Yūki

Born in 1985, Saitama Prefecture

YANAI Yūki worked in Japanese paper-making, creating postcards and business cards, before turning to painting around 2012. When beginning a new piece, he selects colored ball pens with the assistance of staff at Kawaguchi Sun House, the welfare facility he attends. Once facing the picture surface, he becomes entirely absorbed in his work, drawing without concern for his surroundings. He extends lines vertically and horizontally over white drawing paper, vigorously filling each resulting square with bold strokes in orange, green, pink, and light blue. Within these, he adds circles, hearts, and smiling faces—perhaps depicting his fellow artists at his studio. YANAI loves music and often paints while listening to songs playing in the workroom, sometimes unconsciously humming along as he draws with his ballpoint pens.

His art has been featured in exhibitions such as “*Contemporary Outsider Art REAL - What comes next for contemporary art?*” (2019, GYRE GALLERY).



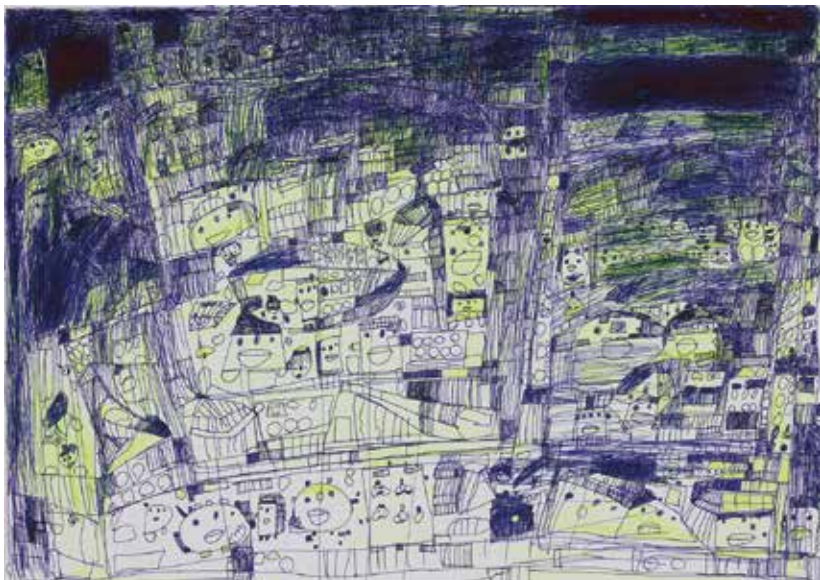
7-1 Untitled 2018年 Untitled 2018



7-2 Untitled 制作年不詳 Untitled Date Unknown



※箭内裕樹の作品は全て社会福祉法人みぬま福祉会 工房集蔵
All of YANAI Yūki's works are in the collection of Kobo-Syu



7-3 Untitled 制作年不詳 *Untitled* Date Unknown



7-5 Untitled 制作年不詳 *Untitled* Date Unknown



7-4 Untitled 制作年不詳 *Untitled* Date Unknown



7-6 Untitled 2024年 *Untitled* 2024



7-7 Untitled 2018年 *Untitled* 2018



7-9 Untitled 2019年 *Untitled* 2019



7-8 Untitled 制作年不詳 *Untitled* Date Unknown



7-10 Untitled 2015年 *Untitled* 2015

各会場風景





渋谷会場 展示室 1



渋谷会場 展示室 2



葛飾会場



三鷹会場

出張イベント トーク&オンライン・ツアー

大島町にて出張イベントを実施した。前半は、展覧会担当学芸員がアール・ブリュットについて紹介した。後半は、第1会場(渋谷)とオンラインでつなぎ、ゲスト・キュレーターのエドワード・M・ゴメズ氏と学芸員が、展示の様子や作品について解説し、参加者との対話も行われた。イベント会場では、出展作品のパネル展示を行った。

日時/2024年11月16日(土) 11:00-12:00

会場/大島町開発総合センター(大島町役場)大集会室

主催/東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)

協力/大島町



オープニングギャラリーツアー [手話通訳付き]

ゲスト・キュレーターのエドワード・M・ゴメズ氏が、本展の概要や出展作家と作品についての詳しい解説を行った。アール・ブリュットについての説明も行われ、初めてアール・ブリュット作品に触れる参加者にとっても、作家や作品をより身近に感じられる機会となった。

日時/2024年9月28日(土) 14:00-15:00

会場/東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1・2

出演/エドワード・M・ゴメズ(本展ゲスト・キュレーター)

手話通訳/瀬戸口裕子、山崎薫



子どものための造形ワークショップ

エドワード・M・ゴメズ氏が講師となり、段ボール、アクリル絵の具、クレヨン、ペンなどを使って、「抽象」をテーマに作品を制作した。小学生とその保護者を中心とした参加者は、自由に「抽象」をテーマにした作品を制作した。作品の制作を通して講師と参加者同士のコミュニケーションが生まれ、創作する喜びを共有する場となった。

日時/2024年10月13日(日) 14:00-16:00

会場/東京都渋谷公園通りギャラリー 交流スペース

講師/エドワード・M・ゴメズ



トークイベント [手話通訳付き]

エドワード・M・ゴメズ氏と、会場構成を担当したアトリエ・ワンの塚本由晴氏を招き、対談形式のトークイベントを行い、本展の出展作品と展示空間のコンセプトについて詳しく解説した。また、それぞれの視点から「日本のアール・ブリュットの魅力」、「展示空間とアクセシビリティ」等についても語られた。

日時：2024年10月26日(土) 17:00-18:30

会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 交流スペース

出演：エドワード・M・ゴメズ、塚本由晴(アトリエ・ワン、東京科学大学大学院 教授)

手話通訳：瀬戸口裕子、山崎薫



アーティスト・トーク [手話通訳付き]

担当学芸員が進行を行い、出展作家やその関係者による話を中心に、作品や作家の制作について紹介した。参加者からの質問に答える場面もあり、作品の制作背景や、具体的な制作方法などを知る貴重な機会となった。

①日時／2024年11月2日(土) 14:00-15:00

会場／東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1・2

ゲスト／柴田統一(出展作家)と関係者、對馬考哉(出展作家)、箭内裕樹(出展作家)と関係者

手話通訳／小徳良枝、山崎薫

②日時／2024年11月3日(日) 14:00-15:00

会場／東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1・2

ゲスト／伊藤駿(出展作家)と関係者、土橋美穂(出展作家)と関係者、松井瑛美(出展作家)と関係者

手話通訳／小徳良枝、山崎薫



視覚障害のある方のための触図をつかった鑑賞ツアー

出展作品から3点を選び、触図を用いて視覚障害のある方々と鑑賞した。実物大の絵を模した触図やモチーフを立体化した触図、参加者一人一人が同時に触ることのできるように複数用意した触図で、触る体験の流れに変化を与える工夫をした。わかりにくい抽象表現に対して、参加者それぞれの触覚や記憶という個別かつ具体的な経験が駆使されることで鑑賞が深まった。

日時／2024年11月10日(日) 10:00-11:30

会場／東京都渋谷公園通りギャラリー

展示室1、2、交流スペース

協力／一般社団法人タップタップラボ、川村真也



分身ロボット「OriHime」とまわる鑑賞ツアー

分身ロボット「OriHime」を用いて、オンラインでの参加者と会場の参加者が対話しながら、作品を鑑賞した。「OriHime」の存在によって、どうにか伝えたい、受け取りたいという気持ちが沸き立ち、コミュニケーションが活発化していた。オンラインによる情報伝達につきものの「手ごたえの感じにくさ」を克服する鑑賞の機会となった。

[一般応募]

日時／2024年12月1日(日) 14:00-15:00／16:30-17:30

会場／東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1、2およびオンライン

[福祉施設]

●日時／2024年11月25日(月) 10:30-11:30

参加施設／社会福祉法人武蔵野会 リアン文京

●日時／2024年11月25日(月) 13:30-14:30

参加施設／社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会 豊島区立目白生活実習所および同分室ぶらす

方法／オンライン

協力／一般社団法人タップタップラボ、con*tio



鑑賞ガイド [全会場]

音声ガイド、展示作品やコンセプトを親しみやすい音声で紹介

出演／早見沙織(声優・アーティスト)

まめガイド

やさしい日本語を用いた文章やイラスト入りで展覧会のテーマや作家を紹介

イラスト／浅野アンナ

デザイン／吉野敏充デザイン事務所

テキスト・編集／東京都渋谷公園通りギャラリー



アール・ブリュット2024巡回展 「抽象のラビンス - 夢みる色と形 -」をふりかえる

秋間 敬代(東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員)

本展は、アール・ブリュットの魅力を東京都内で広く紹介することを目的として、東京都と東京都渋谷公園通りギャラリーが主催する事業である。2024年9月28日に東京都渋谷公園通りギャラリーで開幕し、11月16日には、大島町開発総合センター(大島町役場)大集会室にて出張イベントを開催した。その後、かつしかシンフォニーヒルズ・ギャラリー(2025年1月17日～1月26日)、三鷹市芸術文化センター・美術展示室(1月31日～2月12日)に巡回し、都内3区市町の協力を得た本展は全会期を閉幕した。

今回、都内を巡回する展覧会が5回目を迎えたことを機に、本分野の研究者として国際的に活躍するエドワード・M・ゴメズ氏をゲスト・キュレーターに招き、新たな視点で日本のアール・ブリュットを捉えた展覧会の開催を試みた。国内外での展示歴を有する作家から新たにその創造性が注目される作家まで、多様な作家が出展したことが特徴である。出展作家は、伊藤駿、ガタロ、柴田鋭一、對馬考哉、土橋美穂、松井瑛美、箭内裕樹の7名。いずれも専門的な美術教育を受けることなく、自らの表現を模索し、開花させた。本展は、アール・ブリュットにおける〈抽象〉の表現に注目した展覧会である。テーマの詳細については、本カタログのエドワード・M・ゴメズ氏の論考(6～9頁)を参照されたい。本稿では、各作家の作品と制作について、調査等から得られた情報を記していく。

伊藤駿は、画材の中でも特に木炭を好んで使用している。《鶴》(図版1-7)、《ギター》(図版1-8)の裏面には、制作の際に参考にした写真が貼られている。制作の際には、このような写真や図鑑等を参照することもあれば、実際に動物園や水族館に行き、その感動を基に描き始めることもあるという。一般的に木炭を用いる際には、指や手のひら、ガーゼなどを

使用して木炭紙の凹凸に木炭を入れ込み、定着させることで、濃淡や奥行きを表現することが多い。伊藤の作品では、部分的に手によるぼかしが加えられているが、基本的には木炭を強く表面にのせたままの部分が多く、その黒々とした色調が作品全体に力強さを与えている。

ガタロは2018年の4月から雑巾の連作を描き続けている。《雑巾の譜》と名付けられたこの連作では、プリントの裏紙(図版2-15)、貼り合わせた紙(図版2-1、21、26、27、29以上裏面)など、スケッチブックの他にも様々な紙を用いている。また、裏面に絵を描いた作品(図版2-1裏面:人物、図版2-6裏面:人物、図版2-7裏面:人物、図版2-9裏面:1万円札)、日記や心情を記した作品(図版2-12～14、16、17、20、27、29以上裏面)もある。なかでも「三月も／半ばです／桜も咲き初め／ました／風以前つめたい／雑巾かく／2018 3/22」(図版2-17裏面)という文章を読むと、雑巾を描き続けるガタロの生活が、眼前に浮かんでくるようである。

柴田鋭一は、《せっけんのせ》と呼ばれるシリーズを描き続けている。画用紙にボールペン、色鉛筆、マーカー等で描いた作品に加え、近年はキャンバスにボールペンで描くことを特に好んでいるという(図版3-7、8、10)。泡や植物の蔓のような曲線を勢い良く描き、その線の上や間に大小の丸や四角を自由に描いている。それらの要素は、その勢いに反して画面の外に飛び出すことはない。勢いのある線は、あたかも水槽の中をただようように、画面の端まで到達すると画面の縁や中央に向かって進んでいくのである。内と外に向かうエネルギーが同居している点が、作品の魅力の一つになっている。

對馬考哉は、その時々感じたことを短時間で即興的に描いていく。《友達》(図版4-5)では、最初に向かって左の人物を描いたところ、右側に余白が

作品リスト

伊藤 駿

1-1	ウシガエル	2022年	木炭、紙	50×65	特定非営利活動法人 希望の園
1-2	キングコブラ	2023年	木炭、木炭紙	50×65	特定非営利活動法人 希望の園
1-3	マンモス	2022年	木炭、木炭紙	50.3×65.6	特定非営利活動法人 希望の園
1-4	アメリカザリガニ	2022年	木炭、木炭紙	50.5×65.4	特定非営利活動法人 希望の園
1-5	戦う司会者	2022年	木炭、木炭紙	50.5×65.6	特定非営利活動法人 希望の園
1-6	ベニクラゲ	2023年	木炭、紙	50×65	特定非営利活動法人 希望の園
1-7	鶴	2022年	木炭、紙	50×65	特定非営利活動法人 希望の園
1-8	ギター	2021~2022年	木炭、紙	50×65	特定非営利活動法人 希望の園
1-9	豹	2022年	木炭、紙	50×65	特定非営利活動法人 希望の園
1-10	マンボウ	2022年	木炭、紙	50×65	特定非営利活動法人 希望の園

ガタロ

2-1	雑巾の譜	2018年	鉛筆、ボールペン、紙	20.4×24.4	クシノテラス(櫛野展正)
2-2	雑巾の譜	2019年	鉛筆、色鉛筆、紙	18.3×24.2	クシノテラス(櫛野展正)
2-3	雑巾の譜	2018年	鉛筆、紙	20.6×26.2	クシノテラス(櫛野展正)
2-4	雑巾の譜	2018年	色鉛筆、紙	20.5×27.4	クシノテラス(櫛野展正)
2-5	雑巾の譜	2018年	鉛筆、パステル、油性ペン、紙	19.3×24.5	クシノテラス(櫛野展正)
2-6	雑巾の譜	2018年	油性ペン、色鉛筆、水彩絵の具、紙	19.3×24.3	クシノテラス(櫛野展正)
2-7	雑巾の譜	2018年	油性ペン、鉛筆、アクリル絵の具、紙	19.3×24.4	クシノテラス(櫛野展正)
2-8	雑巾の譜	2018年	色鉛筆、油性ペン、紙	20.4×27.4	クシノテラス(櫛野展正)
2-9	雑巾の譜	2018年	水彩絵の具、紙	19.4×24.4	クシノテラス(櫛野展正)
2-10	雑巾の譜	2019年	鉛筆、紙	16.5×24.3	クシノテラス(櫛野展正)
2-11	雑巾の譜	2018年	鉛筆、水彩絵の具、紙	19.7×24.6	クシノテラス(櫛野展正)
2-12	雑巾の譜	2018年	鉛筆、ボールペン、水彩絵の具、紙	19.7×24.8	クシノテラス(櫛野展正)
2-13	雑巾の譜	2018年	鉛筆、ボールペン、水彩絵の具、紙	19.5×24.3	クシノテラス(櫛野展正)
2-14	雑巾の譜	2018年	ボールペン、アクリル絵の具、水彩絵の具、紙	21.0×27.6	クシノテラス(櫛野展正)
2-15	雑巾の譜	2018年	ボールペン、紙	19.3×24.6	クシノテラス(櫛野展正)
2-16	雑巾の譜	2018年	鉛筆、クレヨン、紙	21.2×27.1	クシノテラス(櫛野展正)
2-17	雑巾の譜	2018年	鉛筆、アクリル絵の具、紙	20.0×25.1	クシノテラス(櫛野展正)
2-18	雑巾の譜	2019年	クレヨン、鉛筆、紙	20.4×24.3	クシノテラス(櫛野展正)
2-19	雑巾の譜	2018年	鉛筆、ボールペン、アクリル絵の具、紙	19.5×24.1	クシノテラス(櫛野展正)
2-20	雑巾の譜	2018年	鉛筆、紙	20.3×26.2	クシノテラス(櫛野展正)
2-21	雑巾の譜	2018年	鉛筆、アクリル絵の具、紙	20.2×25.5	クシノテラス(櫛野展正)
2-22	雑巾の譜	2019年	色鉛筆、紙	18.4×24.4	クシノテラス(櫛野展正)
2-23	雑巾の譜	2019年	クレヨン、鉛筆、紙	15.7×24.4	クシノテラス(櫛野展正)
2-24	雑巾の譜	2018年	鉛筆、紙	19.4×24.7	クシノテラス(櫛野展正)
2-25	雑巾の譜	2018年	鉛筆、紙	19.3×24.3	クシノテラス(櫛野展正)

あったため別の人物を描いた。その二人の様子が友達のように見えたことから、このタイトルを付けたという。《肯定》(図版4-9)という作品では、無数の「肯定」という文字を、画面の左下から煙が湧き上がるように記している。その文字の間には、初めて病院で診察を受けた頃から現在までの経緯を記している。そこには、「何故こんな目に遭うのか」という切実な思いや、「絵を描くのはとても楽しいです」という制作の喜びなどがつづられている。自らが感じる「自分だけ自分ではない」違和感を、落語の演目である「頭山」あたまのまに例えて表現している点も注目される。

土橋美穂が本展に出展した作品は《無心》と《色々》というタイトルのシリーズである。《無心》(図版5-1~3)は和紙、《無心》(5-4~8)はA4のコピー用紙に描かれている。土橋の作品は即興的に描かれるが、自らの目指す表現に適切な技法を用いている。《無心》(図版5-1~3)は、直線、円、点を水性ペンで描いた後、水を垂らして線をにじませることで、画面の外への広がりを生みだしている。また、《無心》(図版5-6)の中心部分に表れた四角は、絵具を含ませたメラミンスポンジをスタンプのように用いて表現し、外側に描いた柔らかな線との対比を効果的に演出している。《色々》(図版5-10)では、先に塗った絵の具が乾かないうちに、異なる濃度や色の絵の具を加える「たらしこみ」の技法を用いて、植物のような有機的な線を表情豊かに表現している。

松井瑛美が通う絵画教室では、とくに技術的な指導は行われず、自由に描ける空間が用意されている。週1回、約1時間半の教室の中で、用意された果物や花などのモチーフを観察しながら、F6のスケッチブックに1枚の作品を描きあげる。まず、油性ペンでモチーフの輪郭を描き、水彩絵の具、アクリル絵の具等を用いて、中心のモチーフから背景へと色を重ねていく。タイトルは本人が付ける場合もあり、本展の出展作品では、《伝説の紫色の謎のフルーツ》

(図版6-1)がそれにあたる。松井は中心となるモチーフの背景に、短い線や小さい点などを繰り返し描くことが多い。一定の規則性を持ちながらも、それぞれ自由な位置にちりばめられた線や点の動きは、作品全体に心地よい揺れを生み出している。

箭内裕樹の出展作品10点は、全てジェルインクのボールペンを使って描かれている。印刷では色の再現が難しいが、《Untitled》(図版7-3)の黄色、《Untitled》(図版7-5)のオレンジ色は蛍光色を使用している。また、《Untitled》(図版7-5)の緑色、《Untitled》(図版7-10)のピンク色、紫色はメタリックな色を使用し、《Untitled》(図版7-6、7)の黄土色と灰色に見える部分は金色と銀色を使用している。これらのメタリックな色は、作品を見る角度と照明により異なる輝きを見せる。それぞれの作品には、笑顔の人物や丸やハート形が所々に描かれている。子細に作品を観察すると、一部はボールペンの筆圧により紙の表面が破れており、箭内の表現への強い思いを感じ取ることができる。

以上7名の作品は、迷宮をめぐるような鑑賞体験を生み出す展示空間の中で、それぞれの魅力を発揮した。この展示空間は、会場構成を担当したアトリエ・ワンが出展作品や作家を取り巻く環境への調査を基に生み出したものである。関連イベントでは、トークイベントや子どもを対象とした造形ワークショップ等を実施し、アール・ブリュットの魅力を様々な角度から体験する機会を提供した。また、昨年度に引き続き「分身ロボット『OriHime(オリヒメ)』とまわる鑑賞ツアー」や「視覚障害のある方のための触図をつかった鑑賞ツアー」を開催し、誰もが利用しやすいギャラリーを目指すプログラムの実施と、その改善に継続して取り組んだ。本展での試みが、より多くの方々からアール・ブリュットの魅力を知る機会となるとともに、本分野が今後さらに発展していく契機となることを期待したい。

2-26	雑巾の譜	2018年	鉛筆、色鉛筆、 アクリル絵の具、紙	19.3×24.1	クシノテラス(櫛野展正)
2-27	雑巾の譜	2018年	ボールペン、水彩絵の具、 紙	16.9×24.3	クシノテラス(櫛野展正)
2-28	雑巾の譜	2018年	鉛筆、油性ペン、紙	19.5×24.7	クシノテラス(櫛野展正)
2-29	雑巾の譜	2018年	鉛筆、色鉛筆、紙	19.2×24.2	クシノテラス(櫛野展正)
2-30	雑巾の譜	2018年	鉛筆、紙	20.1×24.9	クシノテラス(櫛野展正)

柴田 鋭一

3-1	せっけんのせ	2000年	水彩絵の具、クレヨン、紙	36.4×51.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-2	せっけんのせ	2006年	水性マーカー、紙	38.3×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-3	せっけんのせ	2010年	ボールペン、紙	38.4×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-4	せっけんのせ	2011年	色鉛筆、紙	38.4×54.4	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-5	せっけんのせ	1998年頃	クレヨン、水彩絵の具、紙	36.4×51.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-6	せっけんのせ	制作年不詳	水性マーカー、紙	38.4×54.4	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-7	せっけんのせ	2021年	ボールペン、キャンバス	45.5×52.8	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-8	せっけんのせ	制作年不詳	ボールペン、キャンバス	53.0×45.5	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-9	せっけんのせ	2004年	水性マーカー、紙	38.3×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
3-10	せっけんのせ	2016年	ボールペン、キャンバス	45.4×38.0	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集

對馬 考哉

4-1	ウクライナ侵攻	2022年	水性マーカー、厚紙	51.5×73	平川市地域活動支援センター おらんど
4-2	FORGIVE	2024年	クレヨン、水性マーカー、 アクリル絵具、ボール紙	56×67	平川市地域活動支援センター おらんど
4-3	BOW	2024年	鉛筆、ボールペン、 クレヨン、厚紙	56×67	平川市地域活動支援センター おらんど
4-4	NOTHING (BUT THE SKY)	2022年頃	鉛筆、クレヨン、厚紙	51.5×73	平川市地域活動支援センター おらんど
4-5	友達	2020年	クレヨン、紙	29.7×42.2	平川市地域活動支援センター おらんど
4-6	葱	2020年頃	クレヨン、紙	29.8×21	平川市地域活動支援センター おらんど
4-7	軍鶏	2023年	鉛筆、ボールペン、クレヨ ン、アクリル絵の具、厚紙	38.2×54.1	平川市地域活動支援センター おらんど
4-8	無題	2012年	鉛筆、クレヨン、厚紙	33.3×24.2	平川市地域活動支援センター おらんど
4-9	肯定	2024年	ボールペン、木工用 ボンド、紙、ボール紙	67×56	平川市地域活動支援センター おらんど
4-10	無題	2020年	ボールペン、紙	42.2×29.3	平川市地域活動支援センター おらんど

土橋 美穂

5-1	無心	2020年	水性ペン、紙	25.3×36.2	株式会社nullus
5-2	無心	2020年	水性ペン、紙	25.2×35.8	株式会社nullus
5-3	無心	2020年	水性ペン、紙	25.4×36.2	株式会社nullus

5-4	無心	2021年	アクリル絵の具、紙	21×29.5	株式会社nullus
5-5	無心	2021年	アクリル絵の具、紙	21×29.5	株式会社nullus
5-6	無心	2021年	アクリル絵の具、紙	21×29.5	株式会社nullus
5-7	無心	2021年	アクリル絵の具、紙	20.8×29.5	株式会社nullus
5-8	無心	2021年	アクリル絵の具、紙	21×29.6	株式会社nullus
5-9	色々	2022年	アクリル絵の具、紙	39.4×54.4	株式会社nullus
5-10	色々	2022年	アクリル絵の具、色鉛筆、紙	36×54	株式会社nullus

松井 瑛美

6-1	伝説の紫色の謎の フルーツ	制作年不詳	水彩色鉛筆、油性ペン、 紙	40.8×31.8	作家蔵
6-2	アジサイ	制作年不詳	水彩絵の具、アクリル絵 の具、油性ペン、紙	40.8×32.2	作家蔵
6-3	ラ・フランス	制作年不詳	水彩絵の具、アクリル絵 の具、油性ペン、紙	40.8×31.8	作家蔵
6-4	かぼちゃ1	2019年頃	水彩絵の具、アクリル絵 の具、油性ペン、紙	40.8×31.8	作家蔵
6-5	ぶどう	制作年不詳	水彩絵の具、アクリル絵 の具、油性ペン、紙	41.0×31.8	作家蔵
6-6	みかん2	制作年不詳	水彩絵の具、アクリル絵 の具、油性ペン、紙	40.8×31.8	作家蔵
6-7	彼岸花	2015年～ 2016年頃	水彩絵の具、アクリル絵 の具、油性ペン、紙	41.0×31.8	作家蔵
6-8	無題	制作年不詳	水彩絵の具、アクリル絵 の具、油性ペン、紙	40.8×31.8	作家蔵
6-9	無題	制作年不詳	水彩絵の具、アクリル絵 の具、油性ペン、紙	41.0×31.8	作家蔵
6-10	薔薇	制作年不詳	水彩色鉛筆、油性ペン、 紙	41.0×31.8	作家蔵

箭内 裕樹

7-1	Untitled	2018年	ボールペン、紙	38.5×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-2	Untitled	制作年不詳	ボールペン、紙	38.4×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-3	Untitled	制作年不詳	ボールペン、紙	38.4×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-4	Untitled	制作年不詳	ボールペン、紙	38.4×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-5	Untitled	制作年不詳	ボールペン、紙	38.4×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-6	Untitled	2024年	ボールペン、紙	27.1×38.4	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-7	Untitled	2018年	ボールペン、紙	38.4×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-8	Untitled	制作年不詳	ボールペン、紙	38.4×54.4	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-9	Untitled	2019年	ボールペン、紙	38.4×54.3	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
7-10	Untitled	2015年	ボールペン、紙	38×54	社会福祉法人みぬま福祉会 工房集

Foreword

The Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery are pleased to present the Art Brut*2024 Touring Exhibition “Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form.”

This marks the fifth iteration of our traveling exhibition series showcasing the allure of Art Brut works throughout Tokyo. To commemorate this milestone and further heighten interest in Art Brut, we are honored to welcome Edward M. Gómez, a globally renowned Art Brut scholar, as guest curator.

Touring three venues in Tokyo, this exhibition spotlights the realm of abstraction within Art Brut, featuring the free and imaginative worlds of seven Japanese Art Brut artists.

We invite you to experience the power of these artists’ bold and mystical expressiveness and discover the magical, dreamlike worlds they depict in their abstract works.

Throughout history, humans have been fascinated by the mystery and ambiguous emotions that fill our dreams. We have always questioned the meaning of the imagery, moods, and elusive narratives that appear within them. The meanings of many abstract works can be difficult to grasp or sometimes seem beyond comprehension. In this way, dreams and abstract art share similar essential characteristics. This collection of works brings together motifs resembling artifacts found in distant dreamscapes, nebulous images combined with dynamic lines; vibrant, grid-like patterns; colorful, irregular shapes; and surreal dream-like forms. Viewing these works may make observers feel lost in a labyrinth of abstraction.

Lastly, we extend our heartfelt gratitude to the artists who have graciously contributed their valuable works and to all those whose generous cooperation has made this exhibition possible.

September 2024
The Organizers

* Art Brut is a term originally proposed by French artist Jean Dubuffet. Today, it broadly refers to art that is notable for its unique ideas and means of expression, often created by artists who have not received a formal art education.

Welcome to the World of Abstraction and Dreams

Edward M. Gómez, Guest Curator

When assembling an exhibition of artworks made by different artists, all of which relate to or illustrate a particular theme, it can be hard to predict if all of the chosen artworks, when brought together and seen as a group, will come together in a harmonious way.

In fact, often a curator’s vision of an exhibition may change and may be guided by the character of the works to be displayed as they begin arriving at the gallery, where they are unpacked and examined. At that point, the actual artworks begin to “speak” with each other, sharing their energies and spirits. Out of that dialogue between the artworks themselves, the spirit of an exhibition is born.

With “Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form,” the works of seven contemporary, Japanese self-taught artists came together to create a spirit of wonder and explosive creativity. The artists included Gataro, Ito Shun, Matsui Emi, Shibata Eiichi, Tsuchihashi Miho, Tsushima Koya, and Yanai Yūki.

In their own ways, each artist’s works related to the exhibition’s poetic theme, which hinted at the relationship between two phenomena whose meanings are inherently mysterious: abstract art and human dreams.

Both the subject matter of abstract art and the content of dreams can be difficult to understand. Often, viewers of abstract art and people who try to remember the images from their dreams find themselves asking, “What does this artwork mean? What do our dreams mean?” Hungry for answers, they express a need for meaningful answers to such questions. After all, humans want and need a sense of clarity about so many aspects of their lives and the world around them so that they may make sense of reality.

However, abstract art and dreams do not easily reveal their secrets. If they seem to hide their meanings, wrapping them in mists of symbolism and mystery, then for some people, decoding them can become a frustrating task. Still, in their unknowable character lies their strange allure. To explore their possible meanings is to enter a labyrinth of guesswork and uncertain allusions.

Nevertheless, as elusive as the meanings of abstract artworks and dreams might be, it is worth keeping in mind two basic observations. First, it is important to remember that, in their own ways, all works of art always reveal their essential truths. In other words, as some modern artists have commented, when it comes to some abstract works, what you see is what you see. However, what viewers might feel in response to certain abstract works may vary. Everyone’s reaction to or understanding of a work of abstract art might not be the same.

Second, with regard to dreams, it is worth remembering what such pioneers of dream interpretation as the ancient Egyptians and, in more modern times, many psychoanalysts and psychotherapists have observed: However inexplicable it might be, dreaming is a form of consciousness, and the content of our dreams is a form of knowledge.

Against this backdrop of questions and ideas, “Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form,” presented the drawings and paintings on paper of a group of self-taught artists who make art using a variety of materials in a range of different styles. Each artist’s form of expression is different and very personal.

Gataro was a janitor working at a shopping center in Hiroshima. He never studied art-making at an art school. His pictures depict objects and people in his everyday surroundings, including his friends, and the brooms and cleaning supplies he uses to do his job. Often, Gataro picks up pieces of paper trash that he saves and uses to make his drawings.

The exhibition presented a selection of 30 of Gataro’s drawings of one of his favorite subjects - his cleaning rags (known as “zōkin” in Japanese). Using plain pencil, colored pastel chalks, and sometimes daubs of white paint, Gataro depicts his cleaning rags with the skill of Renaissance artists who used the chiaroscuro technique to give their subjects a sculptural quality. (“Chiaroscuro” is an Italian term referring to the play of light, dark, and shadowy parts of a picture that produce three-dimensional effects.)

Regarding these works, Gataro imposed upon himself a schedule of making, as he explained, “one drawing per day, each one within one hour’s time.” He worked fast, because, he said, he was “desperate to start drinking shōchū right away” as soon as he finished a drawing. He recalled, “From the start, my cleaning rags themselves were not exactly rags but instead they were made from garments other people had worn or from a variety of materials.”

Gataro’s drawings present his humble subjects with a sense of reverence. In his artworks, his crumpled cleaning rags become lustrous, jewel-like objects.

Ito Shun is a young artist who is based in Mie Prefecture, where he participates in the art-workshop program at Kibo no Sono (The Garden of Hope), a facility for disabled people. He also performs as the lead vocalist and works as a lyricist in a rock band called “DAKKI AKSON.”

Ito uses charcoal, a material that is rarely found in the works of self-taught artists in the so-called art brut and outsider art categories. He uses it expressively, sometimes smudging his lines with his fingers to make pictures in which he abstracts his subjects, which often come from nature. They include fish, snakes, and other animals. With the energetic lines of his compositions, Ito instinctively understands how to make a recognizable subject abstract and how to create dreamy, mysterious atmospheres.

Based in Beppu, the hot-springs resort town on the east coast of the island of Kyushu, the young female artist Matsui Emi makes vibrantly colored drawings and also pursues her deep interest in Japanese calligraphy (shodō). Therefore, it’s no surprise that her line is both very sure and expressive at the same time. Her colorful paintings on paper often feature loose grids or circular forms. These elements resemble the shapes of flowers or big plant leaves.

Matsui’s brightly colored compositions feel joyous and otherworldly at the same time. Their simple forms and exuberant character bring to mind the experiments of modern artists of the early 20th century who used abstraction as a means of evoking spiritual feelings.

Shibata Eiichi takes part in the art-making program at Kobo-Syu, an art workshop for disabled people in Kawaguchi, in Saitama Prefecture, north of Tokyo. Over the years, Shibata has developed a distinctive abstract language, which he uses to make paintings on canvas or paper. Normally, he uses colored gel pens to make his paintings, most of which have the same title — “Soap.”

Shibata is fascinated by the physical characteristics of soap, and in his compositions, he depicts soap bubbles as dot-like, abstract forms. Sometimes his luminous compositions are very dense and packed with dots of color or thickets of tangled lines. Remarkably, at the same time, they all feel as light as air. In their use of expressive line and color, Shibata’s sophisticated compositions are as elegant and inventive as those of such well-known modern-art pioneers as Henri Matisse, Paul Klee, or Jackson Pollock.

Yanai takes part in the art-making program at Kawaguchi Sun House. Yanai constructs his compositions by drawing many rectangular shapes, which he fills with color. These clusters of rectangular shapes form loose-feeling, almost invisible grids. Sometimes, Yanai buries what appear to be faces or other, symbol-like elements in different areas of his compositions as he plays with the contrasting character of his colors.

Yanai’s color palettes are sometimes so gentle that his compositions can feel as light and buoyant as clouds. Like most of the artists whose works were on display in the exhibition, Yanai explained that, before starting to create a new painting, he never makes preliminary sketches. Instead, his compositions evolve organically.

The artist Tsuchihashi Miho, who lives in Kanagawa Prefecture, south of Tokyo, also works in a spontaneous manner. As a result, each time she starts to make a new painting or drawing, its composition and subject matter remain unpredictable, even to the artist.

Tsuchihashi’s work is especially varied. She is a multifaceted artist who makes drawings and paintings, clay figurines, and hand-sewn animal dolls using thread and fabric. Her paintings on paper offer a variety of abstract expressions, including watery explosions of color and restrained, minimalist

compositions featuring only simple circles or groups of parallel lines.

In fact, Tsuchihashi says, some of her abstract compositions refer to people she knows, such as her family members, or to animals, or to other subjects that come alive in her imagination. In each of Tsuchihashi’s works, viewers can feel the artist’s strong creative impulse.

Tsushima Koya, who lives in Hirakawa, in Aomori Prefecture, makes paintings and drawings in a variety of styles, usually on paper. His energetic compositions are monochromatic or filled with color. Sometimes, Koya uses only a repeated shape, drawn with a simple, thin line, to construct dense, randomly patterned compositions.

Sometimes, his pictures feature abstracted heads or groups of faces and other subjects brought together in diagram-like groupings. But his art can also be completely abstract, as in a small, all-green picture in our exhibition, which seemed to refer to nature, like a close-up photo of a patch of growing grass.

In his works, he always seems to be searching for new ways to express restless thoughts or emotions. In this way, his paintings and drawings seem to share the free-spirited sensibility of rock’n’roll music, which he cites as one of his inspirations.

Regarding the distinctive design of the exhibition, which made inventive use of corrugated cardboard to create display surfaces and free-standing walls, inspiration came to its creators, Tsukamoto Yoshiharu and his team at Atelier Wan (Atelier Bow-wow), from the world of art brut artists.

Since art brut artists often live and create their art on the margins of mainstream society and culture, like Gataro, they might not have a lot of money, but their imaginations know no limits. As a result, to make their art, these artists often use found materials, including paper, cardboard, scraps of wood, and scraps of fabric, along with inexpensive paints and glue. Atelier Wan’s design of the “Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form” exhibition reflected this prominent role of cardboard in the production of many self-taught artists’ works.

It also referred to the archive at Kobo-Syu in Saitama Prefecture, which Tsukamoto visited in person while doing research about contemporary Japanese self-taught artists and the workshops at which some of them create their paintings, drawings, sculptures, and other works. In the archive at Kobo-Syu, Tsukamoto observed how the finished works of this workshop’s participating artists were neatly stored, in cardboard boxes, on shelves. There, they are protected and may be easily retrieved to show to visitors or to send to galleries and museums for exhibitions.

Thus, in using cardboard to create the exhibition’s undulating walls and interior spaces for displaying artists’ works, and, in the exhibition’s second room, to create a tall, artwork-storage wall, Tsukamoto and his team evoked several different aspects of the world of art brut artists.

Like the artworks on view in “Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form,” the exhibition’s clever, unexpected use of ordinary cardboard reminded us that, in abstract art as in our dreams, the unusual is normal, and what cannot easily be understood is as substantive as any fact about the so-called real, material world.

The works in this exhibition celebrated the power of art that is dreamy and abstract — art that is magical, enchanting, and filled with wonder.

Edward M. GÓMEZ, Guest Curator

Art critic; art historian; member of the advisory council, Collection de l’Art Brut, Lausanne, Switzerland. Contributor of critical articles and essays to *The New York Times*, *Hyperallergic*, *ARTnews*, *Art in America*, *The Japan Times*, and other publications. Former correspondent and senior editor of *Raw Vision*, the British magazine about outsider art. Author or co-author of numerous books. Among them: *Genqui Numata* (Franklin Furnace Archive), *Yes: Yoko Ono* (Abrams), *The Art of Adolf Wölfli: St. Adolf—Giant—Creation* (American Folk Art Museum/Princeton University Press), and *Hans Krüsi* (Iconofolio/Outsiders)

Reflecting on the Art Brut 2024 Touring Exhibition “Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form”

AKIMA Takayo, Curator, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

This exhibition is a project organized by the Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery to broadly introduce the appeal of Art Brut throughout Tokyo. Opening at Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery on September 28, 2024, the exhibition included an outreach event at the Oshima Town General Development Center (Oshima Town Hall), Large Meeting Room on November 16. It then traveled to Katsushika Symphony Hills, Gallery (January 17–26, 2025) and Mitaka City Arts Center, Exhibition Room (January 31–February 12), concluding its run after collaborating with three wards and municipalities within Tokyo.

As this marks the fifth touring exhibition within Tokyo, we invited Edward M. Gomez, an internationally active researcher in this field, as guest curator to offer a fresh perspective on Japanese Art Brut. A distinctive feature was the participation of diverse artists, from those with established domestic and international exhibition histories to emerging creators garnering new attention for their creativity. ITO Shun, Gataro, SHIBATA Eiichi, TSUSHIMA Kōya, TSUCHIHASHI Miho, MATSUI Emi, and YANAI Yūki were the seven participating artists. None received formal art education, yet each explored and developed their own means of expression. This exhibition focused on abstract expression within Art Brut. For details about the theme, please refer to Edward M. Gomez’s essay in this catalog (pages 6–9). This text will document information gathered through research about each artist’s works and creative processes.

ITO Shun particularly favors charcoal among his materials. The reverse sides of *Crane* (Plate 1-7) and *Guitar* (Plate 1-8) have reference photographs attached. When creating, he sometimes refers to such photographs and encyclopedias; other times, he begins drawing after visiting zoos or aquariums, inspired by these experiences. Generally, when using charcoal, artists create depth and gradation by pressing the charcoal into the textured surface of charcoal paper using fingers, palms, or gauze. While Ito’s works show some hand-blending in places, he largely leaves the charcoal sitting firmly on the surface, and this stark black tonality gives his entire works their powerful presence.

Gataro has been painting a series of cleaning rags since April 2018. In this series, entitled *Chronicle of My Cleaning Rags*, he uses various support media besides sketchbooks, including the reverse side of handouts (Plate 2-15) and layered papers (reverse of Plates 2-1, 21, 26, 27, and 29). Some works feature drawings on the reverse (Plate 2-1 reverse: figures,

Plate 2-6 reverse: figures, Plate 2-7 reverse: figures, Plate 2-9 reverse: 10,000-yen note), while others contain diary entries or emotional reflections (reverse of Plates 2-12–14, 16, 17, 20, 27, and 29). Reading text such as “It’s mid-March / Cherry blossoms / are starting to bloom / The wind is still cold / Painting my cleaning rags / March 22, 2018” (Plate 2-17 reverse) brings to life an image of Gataro’s daily existence as he continues to draw cleaning rags.

SHIBATA Eiichi continues to create his *Soap* series. While he draws on drawing paper using ballpoint pens, colored pencils, and markers, he has particularly enjoyed drawing with ballpoint pens on canvas in recent years (Plates 3-7, 8, 10). He vigorously draws curves resembling bubbles and plant tendrils, freely adding large and small circles and squares among and above these lines. Despite their vigor, these elements never escape the picture plane. The energetic lines seem to float as if in an aquarium, turning toward the edges or center when they reach the sheet’s boundaries. One of the attractions of these works is this coexistence of energies directed both inward and outward.

TSUSHIMA Kōya creates improvisational drawings expressing his immediate feelings in short sessions. For *Friends* (Plate 4-5), he first drew the figure on the left, then added another figure in the remaining space on the right. The title came from how the two figures appeared to be friends. In *Affirmation* (Plate 4-9), he wrote countless repetitions of the word “affirmation” in Japanese, rising like smoke from the lower left of the sheet. Between these words, he recorded his journey from his first hospital examination to the present. The text conveys both his desperate feelings of “Why must I go through this?” and the joy of creation in statements like “Drawing pictures is delightful.” It’s notable how he expresses his uncomfortable sense of being “myself but not myself” by comparing it to the *rakugo* story “Atama-yama” (Mt. Head).

TSUCHIHASHI Miho contributed works from her *No-Mindedness* and *Various Colors* series to this exhibition. *No-Mindedness* (Plates 5-1–3) uses Japanese paper, while *No-Mindedness* (5-4–8) uses A4 copy paper. Although Tsuchihashi works spontaneously, she employs techniques appropriate to her intended expression. In *No-Mindedness* (Plates 5-1–3), she draws straight lines, circles, and dots with water-based pens, then creates outward expansion by dripping water to blur the lines. In *No-Mindedness* (Plate 5-6), she effectively contrasts the squares in the center, created by using a paint-soaked melamine sponge as a stamp, with soft lines drawn around them. In *Various Colors* (Plate 5-10), she uses the *tarashikomi* technique—adding different concentrations or colors of paint before previous layers dry—to create expressive, organic lines resembling plants.

No technical instruction is given at the painting class MATSUI Emi attends; instead, she is provided with space to draw freely. In weekly 90-minute sessions, she creates one work in an F6 sketchbook while observing prepared motifs such as fruit or flowers. She begins by

List of Works

ITO Shun

● Collection of Kibou-no-Sono (Garden of Hope)

1-1	Bullfrog	2022	Charcoal on paper	50×65	●
1-2	King Cobra	2023	Charcoal on charcoal paper	50×65	●
1-3	Mammoth	2022	Charcoal on charcoal paper	50.3×65.6	●
1-4	Crawfish	2022	Charcoal on charcoal paper	50.5×65.4	●
1-5	Battling MCs	2022	Charcoal on charcoal paper	50.5×65.6	●
1-6	Immortal Jellyfish	2023	Charcoal on paper	50×65	●
1-7	Crane	2022	Charcoal on paper	50×65	●
1-8	Guitar	2021-2022	Charcoal on paper	50×65	●
1-9	Leopard	2022	Charcoal on paper	50×65	●
1-10	Sunfish	2022	Charcoal on paper	50×65	●

Gataro

○ Collection of Kushino Terrace(KUSHINO Nobumasa)

2-1	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil and ballpoint pen on paper	20.4×24.4	○
2-2	Chronicle of My Cleaning Rags	2019	Pencil and colored pencil on paper	18.3×24.2	○
2-3	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil on paper	20.6×26.2	○
2-4	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Colored pencil on paper	20.5×27.4	○
2-5	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil, pastel, and permanent marker on paper	19.3×24.5	○
2-6	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Permanent marker, colored pencil, and watercolor paint on paper	19.3×24.3	○
2-7	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Permanent marker, pencil, and acrylic paint on paper	19.3×24.4	○
2-8	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Colored pencil and permanent marker on paper	20.4×27.4	○
2-9	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Watercolor paint on paper	19.4×24.4	○
2-10	Chronicle of My Cleaning Rags	2019	Pencil on paper	16.5×24.3	○
2-11	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil and watercolor paint on paper	19.7×24.6	○
2-12	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil, ballpoint pen, and watercolor paint on paper	19.7×24.8	○
2-13	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil, ballpoint pen, and watercolor paint on paper	19.5×24.3	○
2-14	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Ballpoint pen, acrylic paint, and watercolor paint on paper	21.0×27.6	○
2-15	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Ballpoint pen on paper	19.3×24.6	○
2-16	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil and crayon on paper	21.2×27.1	○
2-17	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil and acrylic paint on paper	20.0×25.1	○
2-18	Chronicle of My Cleaning Rags	2019	Crayon and pencil on paper	20.4×24.3	○
2-19	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil, ballpoint pen, and acrylic paint on paper	19.5×24.1	○
2-20	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil on paper	20.3×26.2	○

outlining the motif with felt-tip pens, then builds up layers of watercolor and acrylic paint from the central motif to the background. She sometimes names her works herself, as with *Legendary Purple Mystery Fruit* (Plate 6-1). Matsui often repeatedly draws short lines and small dots in the background of the central motif. The movement of the lines and dots, which have a certain regularity but are scattered in various free positions, creates a pleasant sway throughout the work.

All 10 of YANAI Yūki's exhibited works were created using gel ink pens. Although difficult to reproduce in print, *Untitled* (Plate 7-3) fluorescent yellow, and *Untitled* (Plate 7-5) fluorescent orange. Additionally, *Untitled* (Plate 7-5) uses metallic green, while *Untitled* (Plate 7-10) uses metallic pink and purple, and the apparently ochre and gray areas in *Untitled* (Plates 7-6, 7) are actually gold and silver. These fluorescent and metallic colors create different lustrous effects depending on the viewing angle and lighting. Each work contains smiling figures, circles, and heart shapes scattered throughout. Close observation reveals that the surface of the paper has torn in some areas due to pen pressure, conveying Yanai's intense dedication to expression.

These seven artists' works revealed their unique appeal within an exhibition space that created a labyrinthine viewing experience. Atelier Bow-Wow designed this space based on research into the exhibited works and the artists' environments. Related events included talk sessions and children's art workshops, offering various ways to experience Art Brut's appeal. As in the previous year, we held an Exhibition Tour Together with "OriHime" Avatar Robots and a Tactile Tour for the Blind and Visually Impaired, maintaining our commitment to improving programs that aim to make the gallery accessible to everyone. We hope this exhibition's initiatives will provide opportunities for more people to discover the appeal of Art Brut while catalyzing further development in this field.

2-21	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Crayon pencil on paper	20.2×25.5	○
2-22	Chronicle of My Cleaning Rags	2019	Colored pencil on paper	20.4×24.4	○
2-23	Chronicle of My Cleaning Rags	2019	Crayon and pencil on paper	15.7×24.4	○
2-24	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil on paper	19.4×24.7	○
2-25	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil on paper	19.3×24.3	○
2-26	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil, colored pencil, and acrylic paint on paper	19.3×24.1	○
2-27	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Ballpoint pen and watercolor paint on paper	16.9×24.3	○
2-28	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil and permanent marker on paper	19.5×24.7	○
2-29	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil and colored pencil on paper	19.2×24.2	○
2-30	Chronicle of My Cleaning Rags	2018	Pencil on paper	20.1×24.9	○

SHIBATA Eiichi

■ Collection of Kobo-Syu

3-1	Soap	2000	Watercolor paint and crayon on paper	36.4×51.3	■
3-2	Soap	2006	Water based marker on paper	38.3×54.3	■
3-3	Soap	2010	Ballpoint pen on paper	38.4×54.3	■
3-4	Soap	2011	Colored pencil on paper	38.4×54.4	■
3-5	Soap	ca.1998	Crayon and watercolor paint on paper	36.4×51.3	■
3-6	Soap	Date unknown	Water based marker on paper	38.4×54.4	■
3-7	Soap	2021	Ballpoint pen on canvas	45.5×52.8	■
3-8	Soap	Date unknown	Ballpoint pen on canvas	53.0×45.5	■
3-9	Soap	2004	Water based marker on paper	38.3×54.3	■
3-10	Soap	2016	Ballpoint pen on canvas	45.4×38.0	■

TSUSHIMA Kōya

□ Collection of All Round

4-1	Invasion of Ukraine	2022	Water based marker on thick paper	51.5×73	□
4-2	FORGIVE	2024	Crayon, water based marker, and acrylic paint on paper board	56×67	□
4-3	BOW	2024	Pencil, ballpoint pen, and crayon on thick paper	56×67	□
4-4	NOTHING (BUT THE SKY)	ca.2022	Crayon and pencil on thick paper	51.5×73	□
4-5	Friends	2020	Crayon on paper	29.7×42.2	□
4-6	Green Onion	ca.2020	Crayon on paper	29.8×21	□
4-7	Fighting Cock	2023	Pencil, ballpoint pen, crayon, and acrylic paint on thick paper	38.2×54.1	□
4-8	Untitled	2012	Pencil and crayon on thick paper	33.3×24.2	□
4-9	Affirmation	2024	Ballpoint pen, wood glue, and paper on paper board	67×56	□
4-10	Untitled	2020	Ballpoint pen on paper	42.2×29.3	□

TSUCHIHASHI Miho

▲ Collection of nullus Inc.

5-1	No-Mindedness	2020	Water based pen on paper	25.3×36.2	▲
5-2	No-Mindedness	2020	Water based pen on paper	25.2×35.8	▲
5-3	No-Mindedness	2020	Water based pen on paper	25.4×36.2	▲
5-4	No-Mindedness	2021	Acrylic paint on paper	21×29.5	▲
5-5	No-Mindedness	2021	Acrylic paint on paper	21×29.5	▲
5-6	No-Mindedness	2021	Acrylic paint on paper	21×29.5	▲
5-7	No-Mindedness	2021	Acrylic paint on paper	20.8×29.5	▲
5-8	No-Mindedness	2021	Acrylic paint on paper	21×29.6	▲
5-9	Various Colors	2022	Acrylic paint on paper	39.4×54.4	▲
5-10	Various Colors	2022	Acrylic paint and colored pencil on paper	36×54	▲

MATSUI Emi

△ Collection of the artist

6-1	Legendary Purple Mystery Fruit	Date unknown	Watercolored Pencil and permanent marker on paper	40.8×31.8	△
6-2	Hydrangea	Date unknown	Watercolor paint, acrylic paint, and permanent marker on paper	40.8×32.2	△
6-3	La France Pear	Date unknown	Watercolor paint, acrylic paint, and permanent marker on paper	40.8×31.8	△
6-4	Pumpkin 1	Date unknown	Watercolor paint, acrylic paint, and permanent marker on paper	40.8×31.8	△
6-5	Grapes	Date unknown	Watercolor paint, acrylic paint, and permanent marker on paper	41.8×31.8	△
6-6	Mandarin Orange 2	Date unknown	Watercolor paint, acrylic paint, and permanent marker on paper	40.8×31.8	△
6-7	Red Spider Lily	ca.2015 ~2016	Watercolor paint, acrylic paint, and permanent marker on paper	41×31.8	△
6-8	Untitled	Date unknown	Watercolor paint, acrylic paint, and permanent marker on paper	40.8×31.8	△
6-9	Untitled	Date unknown	Watercolor paint, acrylic paint, and permanent marker on paper	41×31.8	△
6-10	Rose	Date unknown	Watercolored Pencil and permanent marker on paper	41×31.8	△

YANAI Yūki

● Collection of Kobo-Syu

7-1	Untitled	2018	Ballpoint pen on paper	38.5×54.3	●
7-2	Untitled	Date unknown	Ballpoint pen on paper	38.4×54.3	●
7-3	Untitled	Date unknown	Ballpoint pen on paper	38.4×54.3	●
7-4	Untitled	Date unknown	Ballpoint pen on paper	38.4×54.3	●
7-5	Untitled	Date unknown	Ballpoint pen on paper	38.4×54.3	●
7-6	Untitled	2024	Ballpoint pen on paper	27.1×38.4	●
7-7	Untitled	2018	Ballpoint pen on paper	38.4×54.3	●
7-8	Untitled	Date unknown	Ballpoint pen on paper	38.4×54.4	●
7-9	Untitled	2019	Ballpoint pen on paper	38.4×54.3	●
7-10	Untitled	2015	Ballpoint pen on paper	38×54	●

[展覧会カタログ]

『アール・ブリュット・ジャポネ』 埼玉県立近代美術館他、現代企画室、2011年

『日本のアール・ブリュット もうひとつの眼差し』アール・ブリュット・コレクション、図書刊行会、2018年

『平成美術—うたかたと瓦礫 1989-2019』世界思想社、2021年

『第4回 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 公募展』日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS、2022年

『第5回 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 公募展』日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS、2023年

[図書、他]

『工房集コレクション 柴田鋭一作品集』社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家 工房集、2011年

『工房集コレクション 箭内裕樹作品集』社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家 工房集、2014年

榎野展正『アウトサイド・ジャパン 日本のアウトサイダー・アート』イーストプレス、2018年

榎野展正『超老芸術』ケンエレブックス、2023年

*上記文献等の他、各作家、関係者へ行ったインタビュー内容を参考にした。

写真クレジット

写真撮影:

山崎剛 [pp.13-17,19-25,27-31,33-37,39-43,45-49,51-55,58-65]

佐藤基 [pp.67(子どものための造形ワークショップ),68(トークイベント),69]

記載のない画像は、東京都渋谷公園通りギャラリーによる撮影

Photo

YAMAZAKI Takeshi [pp.13-17,19-25,27-31,33-37,39-43,45-49,51-55,58-65]

SATO Motoi [pp.67(Creation Workshop for children),68(Talk Event),69]

All images without credit are taken by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

アール・ブリュット2024巡回展
抽象のラビリンス ー夢みる色と形ー
Art Brut 2024 Touring Exhibition
Abstract Labyrinths: Dreaming Color and Form

[展覧会]

ゲスト・キュレーター: エドワード・M・ゴメズ
担当: 秋間敬代 (東京都渋谷公園通りギャラリー)
副担当: 河原功也 (東京都渋谷公園通りギャラリー)
補佐: 小野佳奈 (東京都渋谷公園通りギャラリー)
会場構成: アトリエ・ワン
デザイン: 吉野敏充デザイン事務所
広報物印刷: 関東図書株式会社
広報: 加藤志保、山本千晶 (東京都渋谷公園通りギャラリー)

[カタログ]

企画・編集: 秋間敬代
執筆: エドワード・M・ゴメズ、秋間敬代、河原功也
翻訳: 株式会社アイデア・インスティテュート、池田哲
デザイン: 吉野敏充デザイン事務所
印刷: 関東図書株式会社
発行: 東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー (公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)
発行日: 2025年3月19日

Exhibition

Guest Curator: Edward M. Gómez
Management: AKIMA Takayo, KAWAHARA Koya (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Assistant: ONO Kana (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Exhibition Space Design: Atelier Bow-Wow
Design: YOSHINO Toshimitsu Design Office
Publication Printing: Kanto Tosho Co., Ltd.
Press Officer: KATO Shiho, YAMAMOTO Chiaki

Catalogue

Planning, Editing: AKIMA Takayo
Texts: Edward M. Gómez, AKIMA Takayo, KAWAHARA Koya
Translation: IDEA INSTITUTE INC., IKEDA Satoshi
Design: YOSHINO Toshimitsu Design Office
Printed by: Kanto Tosho Co., Ltd.
Published by: Tokyo Metropolitan Government and
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery (Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
Publication Date: 19 March 2025

©2025 Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery (Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)